

# 賀川豊彦と宮澤賢治

## — 新しい人づくり・新しい郷づくり —

Toyohiko KAGAWA and Kenji MIYAZAWA  
— Human development, Rural development —

松野尾 裕  
Hiroshi MATSUNOO

### 要 旨

昭和初期に、「農村更生と精神更生」を願って「土を愛し、人を愛し、神を愛する」を根本理念に農民福音学校を設立し、その運動を全国に展開した賀川豊彦（1888–1960）。「おれたちはみな農民である ずあぶん忙がしく仕事もつらい もっと明るく生き生きと生活をする道を見付けたい」と願って羅須地人協会を設立し、<sup>イマハト</sup>岩手において「新しい農村の建設」を目指した宮澤賢治（1896–1933）。それぞれに自らの信念に従って活動した豊彦と賢治は、実際にはおそらく出会っていないだろう。しかし、二人がなした仕事を重ね合わせてみると、そこには深く共鳴し合うものがあり、同志と呼んでもおかしくはない一致を見いだすことが出来る。本稿は、このことについて、賢治の「新しい農村の建設」構想は農民福音学校をモデルにしているという仮説に基づき、考察したものである。

#### 目 次

- 第1章 新しい学校
  - 第2章 羅須地人協会の宮澤賢治
    - (1) 宮澤賢治における十字架
    - (2) 「ボラーノの広場」
  - 第3章 農民福音学校の賀川豊彦
    - (1) 岩手の三愛塾と賀川豊彦
    - (2) 胡桃の郷
- むすび

## 第1章 新しい学校

デンマーク<sup>1)</sup>に、フォルケホイスコーレ (Folkehøjskole) と呼ばれる、もともとは農村青年教育を目的とした民間の学校がある。この

北欧の小国のユニークな学校は、牧師で北欧神話に造詣が深く教育に深い関心をよせたグルントヴィ (Nikolaj Frederik Severin Grundtvig, 1783–1872) によって提唱され<sup>2)</sup> 1851年に同志の

1) 内村鑑三 (1861–1930) は、1911 (明治44) 年に個人雑誌『聖書之研究』に講演録「デンマルク国の話—信仰と樹木とをもって国を救いし話」を載せ、デンマークが1864年にプロイセン・オーストリア同盟との戦争 (第二次スレスヴィ戦争) に敗北して豊かな国土を失った後、開拓・植林事業によって国を立ち直らせたことを紹介し、国民の精神性と農業を基盤とした国づくりの大切さを説いた。この内村の

文章は日本のキリスト者の間でデンマークへの関心が生まれるきっかけとなった。内村鑑三『後世への最大遺物・デンマルク国の話』岩波文庫、2011年を参照。

2) グルントヴィ／小池直人訳『ホイスコーレ』上・下、風媒社、2014・15年を参照。この本はグルントヴィが自身の教育理念を原理的に叙述したものである。グルントヴィの教育の根本は「生きた言葉」と「生きた耳」である。

コル (Christen Kold, 1816-1870) がリユスリングに設立したホイスコーレにより具体化された<sup>3)</sup>。その校舎は古い農家を改築したものであったといわれている。カリキュラムには北欧神話, デンマーク史, 教会史, 聖書, 地誌, 歌唱, 算術, 習字などが取り入れられた。1862年から女子を受け入れ, 男子が冬期6ヶ月, 女子が夏期3ヶ月の課程が組まれた。その後, フォルケホイスコーレはデンマーク国内各地に次々と設立されてゆき, 今日国民から強い支持を得ている。

フォルケホイスコーレは国家の定めた教育課程にとらわれず, 設立者が自由に教育内容をつくることに独自性があり, 工芸や手芸, 食物, 体操<sup>4)</sup> などに加え, 気象や電力, 近年ではメディア, 情報, 環境など, カリキュラムは多彩である。

日本にフォルケホイスコーレが紹介されたのは, ホルマン著/那須皓訳『国民高等学校と農民文明』(同志社, 1913年)によってである。フォルケホイスコーレは国民高等学校と訳された。この本の巻頭にアスコウのホイスコーレ (Askov Højskole) の校長であるインゲボルグ・アッペルが那須に寄せた書簡の日本語訳が載せられている。「拝啓……小生は貴国民が我が国民高等学校教育の精神と意義とを理解せられんことを深く希望仕り候。我等の仕事は単に人道に基くのみならず, 又実に国民的にして且宗教的なる事を茲に一言申し添へ候, 敬具」<sup>5)</sup>

ホルマンの著書の翻訳が刊行された1913(大正2)年に, 杉山元治郎(1885-1964)が, 小高国民高等学校を設立した。大阪生まれの杉山は大阪府立天王寺農学校を卒業後, 東北学院へ進んで神学を学んだ。そして牧師となり, 1910年に福島県相馬郡小高町(現・南相馬市)の小高教会に赴任した。杉山は農業の知識を持つ牧師として, ホルマンの本に関心を抱いたに違いない。小高国民高等学校の活動は杉山が小高を去る1920年まで続けられた<sup>6)</sup>。その後杉山は大阪へ戻り, 22年に賀川豊彦と協力して日本農民組合を設立し, 組合長に就いた<sup>7)</sup>。

日本でいち早くデンマークの農民の協同による農業へ関心を向けたのは北海道の農民たちである。明治以降北海道の農家は酪農を取り入れていたが, そこで生産される生乳の多くは煉乳製造会社に煉乳の原料として買い取られており, その売値は会社のいいなりになっていた<sup>8)</sup>。生乳の消費は札幌など道内のごく一部に限られていたから, 生乳の大部分は保存がきく煉乳に加工せざるを得なかったのである。こうした状況を打開するために, 農家の自立を促して協同組合による酪農業を確立させたのが, 1925(大正14)年に設立された北海道製酪販売組合聯合会(北海道酪聯。戦後雪印, 現・雪印メグミルク)である。北海道酪聯の創設メンバーのひとりとなった出納陽一(1890-1976)は, 創設に先立ち, 1921年から約2年間デンマークへ行き(途中から妻の琴子も), 農家に滞在して

3) 1844年にロディンにつくられたものが最初のホイスコーレであるが, 51年にコルによりリユスリングにつくられたものがグルントヴィの構想を真に具体化したものである。佐々木正治『デンマーク国民大学成立史の研究』風間書房, 1999年を参照。コルの教育論については, コル/清水満訳『コルの「子どもの学校論」-デンマークのオルタナティブ教育の創始者』新評論, 2007年を参照。

4) オレロップのホイスコーレで創始された集団徒手体操は, 日本へは玉川学園の創設者である小原国芳(1887-1977)により「デンマーク体操」として紹介された。1928年に放送が開始された「ラジオ体操」は, スウェーデン体操とデンマーク体操を基本としている。

5) ホルマン/那須皓訳『国民高等学校と農民文明』同志社, 1913年, 巻頭。

6) 杉山元治郎の小高教会及び小高国民高等学校における活動は, 東北学院資料室運営委員会「大正デモクラシーと東北学院」調査委員会編『大正デモクラシーと東北学院-杉山元治郎と鈴木義男』東北学院, 2006年に詳しく紹介されている。

7) 日本農民組合は1927(昭和2)年に全日本農民組合と日本農民組合に分裂したが, 翌28年に統一して全国農民組合となり, 杉山が委員長に就いた。

8) 大正から昭和初期の北海道では大日本乳製品, 極東煉乳, 森永製菓煉乳部(1927年に森永煉乳), 明治製菓, 新田煉乳の5つの煉乳会社が酪農家を支配していた。

デンマークの酪農業を実地に学ぶと共に、ホイスコーレの授業に参加する経験を得て帰国した。24年2月に札幌で1週間にわたって北海道畜牛研究会主催による「<sup>デンマーク</sup>丁抹農業講習会」が開かれた。そこでは、デンマークの酪農業の実際が詳細に説明され、加えて出納陽一による「丁抹の偉人グルンドビー」と題する講演が行われた<sup>9)</sup>。そして翌25年5月に北海道酪聯が設立された。北海道酪聯は酪農民育成と協同組合教育を目的として1934（昭和9）年に北海道酪農義塾（現・酪農学園<sup>10)</sup>）を設立した。酪農義塾は札幌郊外の上野幌<sup>かみのつぼろ</sup>にあった出納陽一・琴子の自宅と牧場において始められた。出納はデンマークで自らが経験したホイスコーレの教育を酪農義塾の手本とした。自宅の3階に生徒たちが寄宿し、2階が夫妻の居室、1階を教室とした<sup>11)</sup>。出納牧場（当初は宇納牧場<sup>12)</sup>）に設けられた製酪場で本格的なバターの製造が始まり、その製品は「雪印バター」と名付けられ、北海道酪聯の主要製品として道外へも普及することになった。

さて、宮澤賢治は、その生涯において、北海道を3回訪れている。1回目は盛岡中学5年生の時の修学旅行である。1913（大正2）年5月21日に盛岡を出発し、青森から函館へ渡り、小樽、札幌、岩見沢、<sup>しらおい</sup>白老、室蘭、大沼と回り、函館から青森へ戻って、5月27日に盛岡へ帰った。2回目は23（大正12）年で、花巻農



【写真：上・出納陽一の自宅兼塾生宿舍（現存）。中・出納牧場。下・創業当時のバター製造機ハンドチェーン（雪印バター誕生の記念館に展示）。雪印種苗構内にて松野尾撮影】

9) この講習会の記録が、北海道畜牛研究会編『丁抹の農業』北海道畜牛研究会、1924年である。松野尾裕「グルントヴィと北海道酪聯の開拓者たち—宇都宮仙太郎と出納陽一を中心にして」矢嶋道文編『互恵と国際交流』クロスカルチャー出版、2014年所収を参照。出納陽一と宇都宮仙太郎（陽一の妻琴子の実父）は共に札幌組合基督教会（現・日本キリスト教団札幌北光教会）で洗礼を受けたキリスト者である。

10) 現在、酪農学園大学と、とわの森三愛高等学校がある。

11) 現在、出納陽一・琴子夫妻の自宅と牧場は雪印種苗の構内に保存されている。上掲写真を参照。

12) 当初は宇都宮仙太郎と出納陽一との共同経営による牧場であった。宇都宮の引退により出納陽一の経営となった。

学校（同年に<sup>ひえぬき</sup>稗貫農学校から改称。現・岩手県立花巻農業高等学校）の教員として、生徒の就職を依頼するため、樺太の王子製紙に勤める先輩の細越健に会いに出かけた。7月31日に花巻を出発し、青森から函館へ渡り、函館から旭川へ直行し、旭川で乗り換えて稚内へ向かい、稚内から樺太の<sup>おおどまり</sup>大泊へ渡った。樺太では植物採集などもした後、往路を引き返し、8月12日に花巻へ帰った。この時は旭川で下車だけで、樺太旅行だった。そして3回目が翌24

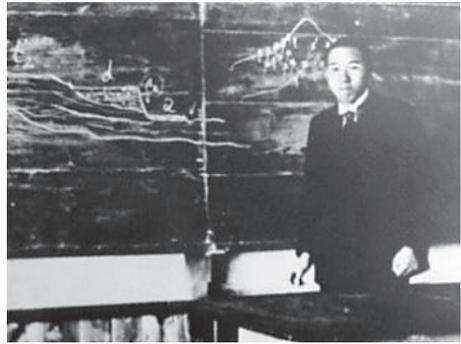
年の花巻農学校修学旅行の引率である。5月18日に花巻を出発し、青森から函館へ渡り、小樽、札幌、苫小牧、室蘭を回り、5月23日に花巻へ帰った。

この3回目の北海道が、賢治に多くの印象を与えた旅行となった。帰着後に賢治が書いて学校へ提出した「修学旅行復命書」が残っている。復命書には旅行中の訪問先でのことが細かく記述されており、そこには賢治が北海道で見聞したこと、そして花巻に帰ってから何をしたいと考えたかが率直に綴られている。復命書を読んでみよう。

賢治ら修学旅行生一行は、函館から小樽へ向かい、小樽高等商業学校（現・小樽商科大学）の「商品標本室」で「独乙の馬鈴薯を原料とせる三十余種の商品標本、米国の各種穀物を<sup>あぶり</sup>炙膨脹せしめたる食品<sup>13)</sup>等に就て注意せしむ」。札幌へ移動し北海道帝国大学（現・北海道大学）では、総長（初代）の佐藤昌介<sup>14)</sup>が花巻の出身であったこともあり、佐藤総長の出迎えを受けた。佐藤は生徒らに講話し、「新開地と旧き農業地とに於る農業者の諸困難を比較し殊に后者に<sup>しんし</sup>処して旧慣弊風を改良し日進の文明を<sup>りつと</sup>摂取すること榛茨の未開地に当るよりも難く大なる覚悟と努力とを要する」と語った。その後、「学生食堂に於て菓子牛乳の饗を受く。牛乳甘美にして新鮮且つや<sup>すずめる</sup>勸の切なるまゝに恐らくは各人一立<sup>リットル</sup>を超ゆるまで総長の好意を辞せざりしが如し」。次いで中島公園の「植民館」へ行き、そこに展示されている「開墾順序の模型」を見

13) ポップコーン類であろうか。

14) 佐藤昌介（1856-1939）は、盛岡藩士佐藤昌蔵の子として花巻に生れ、東京英語学校（のち東京大学予備門。現・東京大学）を経て、札幌農学校に第1期生として入学、1880年に卒業した。なお、内村鑑三は、高崎藩士内村宜之の子として江戸小石川に生れ、東京英語学校で佐藤昌介と同級生だが、病気のため卒業が1年遅れ、札幌農学校へ第2期生として入学した。盛岡藩士新渡戸十次郎の子として盛岡に生れた新渡戸稲造（1862-1933）は、東京英語学校で上級生の佐藤昌介と知り合い、札幌農学校へ第2期生として入学した。



【写真：1925年頃、花巻農学校で講義をする宮澤賢治。出典：宮澤清六・他編『写真集宮澤賢治の世界』p.68】

学した。賢治はこう書いている。「恐らくは本模型の生徒将来に及ぼす影響極めて大なるべし。望むらくは本県亦物産館の中に理想的農民住居の模型数箇を備へ将来の農民に楽しく明るき田園を形成せしむるの目標を与へられんことを」。そして、苫小牧へ向かう鉄道の車中から広大な大地に建つ家屋を眺め、「早く我等が郷土新進の農村建築家を迎へ、従来の不経済にして陰鬱、採光通風一も<sup>よき</sup>佳なるなき住居をその破朽と共に葬らしめよ」と記し、「若し生徒等この旅を終へて郷に帰るの日新に欧米の観光客の心地を以てその山川に臨まんか<sup>15)</sup>」と。

宮澤賢治は、この年、1924年の4月に詩集『春と修羅』を刊行し、5月に上記の北海道旅行、8月に花巻農学校の生徒らと共に自作の演劇「ポランの広場」を上演、12月には童話集『注文の多い料理店』を刊行した。そして暮れ頃には、童話「銀河鉄道の夜」の初稿も書き上げた。1924年は賢治にとり実り多い年であった。

1924年秋、賀川豊彦は地球一周の旅に出た。11月に横浜を出発してアメリカ合衆国へ行き、次いでヨーロッパ諸国を回り、エルサレム、カイロを経て翌年7月に帰国するという9ヶ月余りを要した旅行であった。

15) 宮澤賢治「修学旅行復命書」『新校本 宮澤賢治全集』第14巻、本文篇、筑摩書房、1997年所収、62-67頁。

その途中、25年5月中旬に賀川はデンマークを訪れた。目的はフォルケホイスコーレを見学することであった。ドイツからフェリーでデンマークへ渡った賀川は、教会関係者の案内により各地のホイスコーレを訪ねた。

当時屈指の規模となっていたハスラウのホイスコーレでは、150名の生徒たちと共に食事をし、「寄宿舎」「畜産場」「手工教場」「体操場」を見て回った<sup>16)</sup>。アスコウのホイスコーレでは、校長のアッペルの厚意により宿泊させてもらった。アスコウでの滞在を賀川は次のように記録している。「アスコウでは農民学校の生徒が、<sup>はた</sup>機を織つて居た。その生徒等は皆、前の文部大臣と一緒に居を共にして、実に愉快的な日をそこで送つて居た。私は、日本の文部大臣の一人がアプレル氏程の勇気を出して欲しいと思つた。東京市の社会教育課少年部主事をして居られた平林<sup>ひろんど</sup>広人兄は、私がアスコウで一晩泊めて貰つた時に、矢張アスコウの生徒として来て居られたが、感激の言葉で『宗教です、宗教です。デンマークの精神は宗教です』と私に繰返して云はれた」<sup>17)</sup>

上に引用した賀川の文章に出て来る平林広人(1886-1986)は、日本に帰国後、1929年に静岡県田方郡西浦村<sup>くづら</sup>久連(現・沼津市)に設立された興農学園の初代校長に就いた。同年6月に行われた開校式には、学校設立を願いながら26年に死去した渡瀬寅次郎<sup>18)</sup>の遺族や新渡戸

稲造が出席し、平林を含め教員2名、生徒7名による開校であった。興農学園では「体操場」が設けられ、「久連女子体操団」がつくられて、地元農家の女性たちを集めて体操指導が行われたことはきわめて特徴的である<sup>19)</sup>

賀川のデンマーク滞在に戻ろう。賀川はホイスコーレの様子を現地の手紙に書き、「S兄」(杉山元治郎)に伝えた。「S兄、農村を改良するには、矢張、グルンドウイヒ流にやらなくちやいけないと思ひます。……私は繰返して申します。デンマークの農村問題は、数字や統計の問題ではありません。それは根底に於て、精神主義的のものです。日本がいくら表面だけを模倣してもそれは、<sup>とて</sup>逆も成功は<sup>おほつか</sup>覚束なうございませぬ。問題は、愛の社会組織です。つまり一致です。協力です。愛です。理想です。努力です。私はデンマークに來たことを、心から喜んで居ります。……私は、日本に帰ればも少し落付いてやる<sup>つもり</sup>心意にして居ります。落付いてと云ふ意味は、もう少し精神主義的に、といふ意味です。私は枯木に花を咲かすような運動をしたいと思つてゐませぬ。私は一生を種播く人となつて終り度いと思つて居ります。グルンドウイツヒの最初の学校は、生徒が僅か四人しかありませんでした。私は、その四人から始めたいと思つて居ります」<sup>20)</sup>

賀川豊彦は、デンマークの地で、日本へ帰国

16) 賀川豊彦『雲水遍路』(改造社、1926年)『賀川豊彦全集』第23巻、キリスト新聞社、1963年所収、124～125頁。

17) 同上書、132頁。

18) 渡瀬寅次郎(1859-1926)は、旧幕臣の渡瀬源四郎の子として江戸牛込に生れ、沼津に移住。東京英語学校を経て、札幌農学校に第1期生として入学し、1880年に卒業した。渡瀬は開拓使につとめた後、東洋英和学校(現・麻布中学校・高等学校)などの教員を経て、1892(明治25)年に「東京興農園」を創業。種苗や農機具を販売する事業を始めると共に、1902年に静岡県久連に約15町歩(=15ヘクタール)の山林を取得して農場を拓き、みかん栽培に取り組んだ。沼津市明治史料館編『興農学園-みかん村とデンマーク教育』沼津市明治史料館、2000年を参照。

19) 平林広人『丁抹農村文化の真髓』文化書房、1930年を参照。同書の巻末に「興農学園概要」が付されている。その後、平林は1931年7月に御殿場農民福音学校で行われたイエスの友会夏期修養会に講師として参加し、31年に興農学園校長を退いた。後任として平林と共に教員をつとめていた大谷英一が校長に就き、32年に久連国民高等学校と改称、キリスト教主義を堅持し、34年11月にヴォーリズの設計による礼拝堂を建設した。38年1月と40年1月には日本基督教青年同盟(YMCA)主催の第1回と第3回の農村冬季学校会場となり、賀川豊彦が訪れた。現在、財団法人興農学園が農地を管理している。沼津市明治史料館編『興農学園-みかん村とデンマーク教育』を参照。

20) 賀川豊彦『雲水遍路』『賀川豊彦全集』第23巻所収、131～132頁。

した後の自分の仕事を考えた。「問題は、愛の社会組織です。つまり一致です。協力です。愛です。理想です。努力です」。そこから生まれたのが、農民福音学校であった。

一方、宮澤賢治は、農学校の生徒たちとの北海道旅行で、「将来の農民に楽しく明るき田園を形成せしむる」ために自分がしなければならないことを考えた。そこから生まれたのが、羅須地人協会であった<sup>21)</sup>

## 第2章 羅須地人協会の宮澤賢治

### (1) 宮澤賢治における十字架

宮澤賢治は、上述した通り、1924（大正13）年、28歳の時に、詩集『春と修羅』と童話集『注文の多い料理店』を刊行した。これは賢治が存命中に刊行することの出来た唯ふたつの作品集であるが、当初はほとんど評価を得られなかった。賢治はその後も詩や童話を書き続けた。それらのうちの一部は雑誌や新聞に発表された。後に代表作のひとつとなる「銀河鉄道の夜」は、1924年の暮頃に初稿が出来たものの、その後推敲が重ねられ、賢治の生前にはついに発表されないまま草稿として残され、賢治の死後1934（昭和9）年に刊行された全集に収録される形で公表された。

さて、「銀河鉄道の夜」の「鉄道」は岩手軽便鉄道<sup>22)</sup>がモデルであるというのが通説であるが、近年、北海道にあった王子軽便鉄道と苫小牧軽便鉄道（両方を合わせて王子軽便鉄道と

呼ばれた）に着想を得たとする説が出されている<sup>23)</sup> この鉄道は王子製紙が苫小牧工場への電力及び原料供給の便を図るために敷設し、貨物・旅客両輸送を行った<sup>24)</sup> 賢治は、上に述べた通り、1924年5月の北海道旅行（修学旅行の引率）で苫小牧に寄っており、そこで軽便鉄道を見て着想を得、その沿線に点在するいくつかの場所を作品のなかに組み入れたというのである。賢治が王子軽便鉄道に興味を持ったとしても、実際に乗ったことはないようなので、沿線の風景がそのまま作品に活かされているというには無理があると思われるが、賢治は23年に樺太へ行き、王子製紙に勤務する先輩に会った時に、この先輩から王子軽便鉄道の話を、その沿線のことも含めて聞いたと想定すれば、上記の無理はやや薄められる。

王子軽便鉄道説で興味深いのは、この説によると、苫小牧軽便鉄道の終点佐瑠太駅（現・富川駅）よりさらに先に位置する浦河郡西舎村（現・浦河町）に入植した神戸のキリスト者たちによる開拓団赤心社<sup>25)</sup>が銀河鉄道の終着駅「サウザンクロス」のモデルだとしていることである。

「銀河鉄道の夜」の叙述には、知られている通り、冒頭から終末まできわめてキリスト教的な内容が含まれていて、それがこの作品の魅力にもなっている<sup>26)</sup>

21) 賀川豊彦は1888（明治21）年7月10日、神戸市に回漕業を営む家の次男として生れ、1960（昭和35）年4月23日に東京で死去した。宮澤賢治は1896（明治29）年8月27日、岩手県稗貫郡里川口町（現・花巻市）に質屋・古着商を営む家の長男として生れ、1933（昭和8）年9月21日に同地で死去した。豊彦と賢治は共に商家の生まれである。出自への否定的な思いと、出自を越えて自身の生きる根拠をつくろうとする苦闘が二人の人生には共通している。

22) 岩手軽便鉄道は1915（大正4）年に全線開通した狭軌鉄道。花巻駅から遠野駅を経て仙人峠駅（現・廃止）を結んだ。後に国有化され釜石西線（現・JR東日本釜石線）となった。

23) 根本啓子氏の説。「『銀河鉄道の夜』地上モデルは王子軽便鉄道!?!」『WEBみんぼう苫小牧民報社』2016年11月28日。http://www.tomamin.co.jp/20161145086

24) 王子軽便鉄道（苫小牧と千歳川上流の発電所及び支笏湖畔とを結んだ。通称「山線」。現・廃線）は1908（明治41）年に開通した。苫小牧軽便鉄道（苫小牧と佐瑠太を結んだ。通称「浜線」。現・JR北海道日高本線）は1913（大正2）年に開通した。

25) 赤心社は、1880（明治13）年に神戸で設立された北海道開拓団。鈴木清（1848-1915）、沢茂吉（1853-1909）らが中心となって浦河に入植し、牧畜業を興した。村の中心に浦河公会（現・日本キリスト教団元浦河教会）の会堂が建てられた。なお、当時の会堂は現在、札幌の北海道開拓の村に移築、保存されている。

「銀河鉄道の夜」のあらすじ<sup>27)</sup> 物語の主人公は少年ジョバンニ。彼の父親は漁師だが、漁に出たきり帰ってこず、らっこを獲りに行ったのだと噂されていた<sup>28)</sup> 銀河の祭りの日の夕方、学校で天の川について学んで帰宅したジョバンニは、病気の母親のために牛乳を丘の上の牧場まで受け取りに行った。丘でジョバンニはいつの間にか眠ってしまい、夢を見た。ジョバンニは親友のカムパネルラと一緒に汽車に乗っている。汽車がノーザンクロス（北の十字架）駅を出発し、サウザンクロス（南の十字架）駅まで進んで行くなかで、ジョバンニらは「黒い洋服をきちんと着たせいの高い青年」と出会う。青年は男の子と女の子の姉弟の手を引いている。青年は姉弟の家庭教師で、この子たちを連れて汽車に乗ることになった理由を説明し、女の子はお父さんから聞いたという「<sup>さそり</sup>蠍」の話をする。ジョバンニは青年と会話を重ねながら「ほんたうのたった一人の神さま」を問い続ける。そして終着駅のサウザンクロスで青年らが降り、他の乗客たちも降りてしまうと、二人はこう語り合う。「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、どこまでもどこまでも一緒に行かう。僕はもうあのさそりのやうにほんたうにみんなの幸のためならば僕のからだなんか、百べん灼いてもかまはない。」「うん。僕だってさうだ。」カムパネルラの眼にはきれいな涙がうかんでおりました。ジョバンニがさら

に、「けれどもほんたうのさいはひは一体何だらう。」と問いかけると、カムパネルラは「僕わからない。」と答え、その直後、カムパネルラが消えてしまう。そしてジョバンニは眠りから目が覚め、丘を降りてゆくと、カムパネルラが川に落ちた同級生を救った後、行方不明になったことを知った。ジョバンニはカムパネルラの父親から、ジョバンニの父親から便りがあり、もうすぐ漁から帰るそうだと聞かされた。ジョバンニは父の知らせと牛乳を持って母の待つ家へ帰った。

宮澤賢治が聖書とキリスト教に親しんでいたことについては<sup>29)</sup> 近年、研究が深められている<sup>30)</sup> 花巻で賢治と親交があったキリスト者としてまず挙げられるのが斎藤宗次郎（1877-1968）である。斎藤宗次郎は岩手県<sup>ひがしわが</sup>東和賀郡笹間村（現・花巻市）に生れ、内村鑑三の著作を読んだことをきっかけに入信し、内村との交流を深め、花巻で小学校教師、次いで新聞取次業を営んだ後、東京へ出て、内村に付き従い、1930年に内村が死去するまで彼の忠実な弟子となった。

斎藤は新聞取次業のかたわら農園を持ち、いちご栽培に取り組んでいた。いちごによる賢治との交際の様子を、斎藤の日記『二荊自叙伝』から拾ってみよう。「夕方宮沢賢治氏宅に苺苗六十本頒布す」（1922年4月28日）。「午後館区内の集金に出て農学校で校長に会い柿の話

26) 宮澤賢治は日蓮宗の在家団体である国柱会に関わり、法華経への熱烈な信仰をもっていた。「銀河鉄道の夜」に描かれた宗教的世界をどう理解すればよいのかは、宮澤賢治研究における一大テーマとなってきた。賢治における法華経信仰の特徴から「銀河鉄道の夜」を解釈した研究として、松岡幹夫『宮沢賢治と法華経-日蓮と親鸞の狭間で』昌平舎出版会、2015年、第1章を参照。

27) 最終稿による。宮澤賢治『銀河鉄道の夜』【新校本宮澤賢治全集】第11巻、本文篇、筑摩書房、1996年所収。

28) 毛皮の利用を目的としたらっこ猟獲が明治期に日高地方沿岸などで行われた。1912（明治45）年4月に制定された<sup>ひつしや</sup>猛虎臘肭獸猟獲禁止ニ関スル法律により禁止された。

29) 賢治は盛岡中学校在学中に盛岡浸礼教会（現・日本キリスト教団内丸教会）を牧会していた（期間1907～20年）バプティスト派宣教師ヘンリー・タッピング（Henry Topping, 1853-1942）に英語と共に聖書を学んだ。周知の通り、賀川豊彦の英語秘書をつとめたヘレン・タッピング（Helen Topping, 1889-1981）は、ヘンリーと妻のジェネヴィエーブ（Genevieve Faville Topping, 1863-1953）の長女である。ヘンリーは晩年、妻とヘレンとの3人で東京の賀川豊彦の自宅近く（世田谷区桜上水）で生活し、賀川の活動を支援した。タッピング家の人々は賢治を話題にすることがあったのではないかと推測することは可能である。

30) 雑賀信行『宮沢賢治とクリスチャン 花巻篇』雑賀編集工房、2015年。

や、校舎移転後の新計画に就て語り合った。春季予に苺の苗を頒けて呉れいとのことであった。“斎藤さんから譲られたのだとして長く繁殖せしめたい”とのことであった。学校には宮沢賢治君が居るから実現さるゝこと、思うた」(23年2月5日)。「西方集金に際し五時四十分より農学校にて宮沢賢治先生と物語った。始めに苺、甘藍、蕃茄などの話があった」。そしてこれに続けて斎藤は、こう記している。「次に先生自作の“黎明行進歌”というを示され且つ所感を求められた。予は平和と希望に満ちたよい歌であるというたら、安心したと言われた。時節柄、革命的反抗的の意あるものゝ如く誤解せられしは遺憾の至りであると言われた。“荒蕪地開墾の歌”というをも見せられた。そして何れも譜に合せ声高らかに歌って聞かせて呉れた。それから教育の根本問題、農村問題、田園劇の話などあって二人共興味深き時間を過ぎて別れた」(23年6月3日)<sup>31)</sup>

斎藤の日記から1923年6月に賢治が「田園劇」を構想していたことがわかる。そして、24年8月11日、花巻農学校で「田園劇」が上演された。斎藤は演劇に興味を持っていなかったが、賢治からの招待ということもあり、農学校へ観劇に出かけた。斎藤の日記にこう書かれている。

「農学校の宮沢賢治先生に招かれて農学校に田園劇を八月十一日に見た。

- 一、 饑餓陣営 児童劇
- 二、 植物医師 郷土喜劇
- 三、 ボランの広場
- 四、 種山ヶ原の夜 スケッチ

予の劇を嫌うや甚だし。真面目なる人生と森厳なる天然を愛する人は此の様の事に興味を持つべき筈なし。凡俗の人々は之を見て益々人格の低落を招くのみである。それ故心ある者は決して観劇を敢てするものでない。然しながら今

31) 斎藤宗次郎／栗原敦・山折哲雄編『二荊自叙伝』上、岩波書店、2005年、122、228、275頁。

回の田園劇たるや数ヶ月前予が農学校に至りし時宮沢賢治氏が此事を試みんとするを予に告げ且つ来り観られんことを乞うというのであった。二、三日態々招待状を持参せられたれば之に応ずるの礼儀なるを知り譬え十分間でもと思ひながら月明の宵を急ぎて静かなる田園校に苦心の創作如上の田園劇を少からざる興味を以て観ることが出来た。微塵の艶めかしさはなく天真素朴なる構想に感じた。恐らくは天下独歩の企てゝある。氏の農村改革の一端を見ることが出来る。十一時半独帰った」(24年8月11日)<sup>32)</sup>

宮沢賢治の「田園劇」は、同年5月の北海道修学旅行の引率の際に思った「将来の農民に楽しく明るき田園を形成せしむる」ための行動として、賢治なりに考え具体化したものであった。斎藤は、賢治のたつての招きなので渋々出かけた観劇であったが、賢治のこの行動の意図については、「氏の農村改革の一端を見ることが出来る」と適切に評価している。斎藤宗次郎は、賢治より19歳も年上であり、かつ斎藤は熱心なキリスト者で、賢治は日蓮宗信者であるという信仰上の違いがあるにもかかわらず、賢治を先生と呼び、賢治もまた斎藤を心から尊敬していた<sup>33)</sup>

1926(大正15)年春、賢治が花巻農学校を辞め、実家を出て一人暮らしを始めることにし

32) 同上書、470～471頁。

33) 斎藤宗次郎は賢治の父親宮沢政次郎とも交際しており、政次郎について斎藤の日記にこう記されている。「集金の途上豊沢町に宮沢政次郎氏に会った。祭典に際し山車などを出して馬鹿な騒ぎを為すことの不心得を難じ、日本の教育の腐敗を慨し、米国の将来を論じ、内村先生の長所を称し、親鸞の裏日本、日蓮の表日本に迎えられる、所以を語り、人物は所詮地方の産たるを免れざるを語るを聞いた。当市に於て識見高き一人と言わねばならぬ。賢治は氏の長男である」(1924年9月13日)。同上書、481頁。また、こういうこともあった。斎藤が花巻電気軌道に乗り志戸平へ向かう途中で偶然に宮沢政次郎と乗り合わせた時、「宮沢政次郎氏大林橋二箇を持ち来りて予の掌中に投じ去った。其の好意に感じた」(22年10月15日)。同書、179頁。斎藤はこのことを賢治に話したのではなかろうか。

た時、斎藤宗次郎は花巻を離れ東京の内村鑑三のもとへ行く決心をした。斎藤は出郷の前に賢治の新宅を訪れた。そこは賢治の祖父が隠居所として建てた家で、賢治の亡き妹トシが結核の療養に使ったところでもある。賢治はその家を改築した。斎藤の日記より。「五月十五日午後、根子上館附近なる宮沢賢治先生の新居宅を訪うた。新家屋は予が一ヶ月前に尋ねし時とは大いに面目を新たにし室内の整頓は勿論、愛蔵の書籍も運ばれ、客を迎える準備も整うた様に見えた。曾て載り倒された許りの木材は影を納め北林の中には炊事場兼食堂として一坪のバラック家屋は建てられ大体の掃除も済み、<sup>びょうほ</sup>苗圃には各種の草花の種子は播種せられてあった。先生は出で、予を懇懇に迎え向後の活動に就て腹案を語られ、且つ予に対して上京後の仕事に就て問われた」(26年5月15日)<sup>34)</sup> 農学校をやめた賢治は、この新宅で羅須地人協会をつくり、新しい活動を始めた。そして斎藤は、新聞取次業をやめて東京へ行き、以後内村鑑三のもとを離れなかった。

斎藤宗次郎は賢治に信仰の話をしなかったといわれている<sup>35)</sup> 斎藤が信仰上のことを話題にしなかったというのは確かにそうかもしれない。だが、賢治にとって斎藤の信仰はきわめて大きなテーマであった。だからこそ賢治は、花巻を出る斎藤に「上京後の仕事に就て」問うたのである。

「銀河鉄道の夜」に描かれた「黒い洋服をきちんと着たせいの高い青年」は斎藤宗次郎に違いない。物語で青年は「苹果」の香りと共に登場する<sup>36)</sup> 汽車が終着駅サウザンクロスに近づき、ジョバンニと青年が別れる場面をもう一度辿ってみよう。

「もうちきサウザンクロスです。おりる支度をして下さい。」青年がみんなに云ひました。

「僕も少し汽車へ乗ってるんだよ。」男の子が云ひました。カムパネルラのとりの女の子はそはそは立って支度をはじめましたけれどもやっぱりジョバンニたちとわかれたくないやうなやうすでした。

「こゝでおりなけあいけないのです。」青年はきちっと口を結んで男の子を見おろしながら云ひました。「厭だ。僕もう少し汽車へ乗ってから行くんだい。」ジョバンニがこらえ兼ねて云ひました。「僕たちと一緒に乗って行かう。僕たちどこまでだって行ける切符持ってるんだ。」「だけどあたたしたちもこゝで降りなけあいけないのよ。こゝ天上へ行くとこなんだから。」女の子がさびしさうに云ひました。

「天上へなんか行かなくなつてい、ぢゃないか。ぼくたちこゝで天上よりももっといゝところをこさえなけあいけないって僕の先生が云つたよ。」「だつておつ母さんも行ってらっしゃるしそれに神さまが仰っしゃるんだわ。」「そんな神さまうその神さまだい。」「あなたの神さまうその神さまよ。」「そうぢゃないよ。」「あなたの神さまってどんな神さまですか。」青年は笑ひながら云ひました。「ぼくほんたうはよく知りません、けれどもそんなでなしにほんたうのたった一人の神さまです。」「ほんたうの神さまはもちろんたった一人です。」「あゝ、そんなでなしにたったひとりのほんたうのほんたうの神さまです。」「だからそうぢゃありませんか。わたくしはあなた方がいまにそのほんたうの神さまの前にわたくしたちとお会ひになることを祈ります。」青年はつゝ、ましく両手を組みました。女の子もちょうどその通りにしました。みんなほんたうに別れが惜しさうでその顔いろも

36) 註 33 を参照。「林檎」は在来種の和りんご、「苹果」は西洋りんごであり、当時は区別されていた。明治期に青森県のキリスト者佐藤勝三郎(1854-1933)が生地の南津軽郡藤崎村(現・藤崎町)に苹果園を開き、苹果栽培の普及に努めた。岩手県で苹果の生産が拡大するのは昭和初期である。繭価下落による養蚕不振の打開を図るため、桑園の苹果園への転換が進められた。

34) 斎藤宗次郎/栗原敦・山折哲雄編『二荊自叙伝』下、岩波書店、2005年、244頁。

35) 雑賀信行『宮沢賢治とクリスチャン 花巻篇』55頁。

少し青ざめて見えました。ジョバンニはあぶなく声をあげて泣き出さうとしました。

「さあもう支度はいゝんですか。ちきサウザンクロスですから。」<sup>37)</sup>

ジョバンニとカムパネルラは共に宮澤賢治の分身だと考えられる。ジョバンニは「ほんたうのたった一人の神さま」を知りたいという思いで胸がいっぱいだった。しかしその答えは得られないままに、黒い服の青年は「わたくしはあなた方がいまにそのほんたうの神さまの前にわたくしたちとお会ひになることを祈ります」と静かに述べて、立ち去ってしまった。ジョバンニとカムパネルラはまだ汽車の中にいる。ジョバンニは、カムパネルラと「どこまでもどこまでも一緒に行かう」と願う。しかし願いは叶わず、カムパネルラは青年の後を追った。ジョバンニとカムパネルラは離れ離れになってしまった。

斎藤宗次郎が花巻を去った後、宮澤賢治は、ジョバンニとして生きていくのである。賢治には地上での仕事が残された。「天上へなんか行かなくなつていゝぢゃないか。ほくたちこゝで天上よりももっといゝとこをこさえなけあけないうって僕の先生が云つたよ」。斎藤は賢治と別れる時に、「こゝで天上よりももっといゝとこをこさえ」るよう、賢治に言い残したのかもしれない。賢治が手帳に書きつけた「雨ニモマケズ」のなかの「慾ハナク 決シテ瞋ラズ イツモシツカニワラツテキル」人は斎藤宗次郎だといわれている。賢治は「サウイフモノニ ワタシハナリタイ」と書いた<sup>38)</sup>

## (2) 「ポラーノの広場」

1926（大正15）年1月に花巻農学校の構内に岩手国民高等学校が開校した<sup>39)</sup> この学校は

37) 宮澤賢治「銀河鉄道の夜」『新校本 宮澤賢治全集』第11巻、本文篇、164～165頁。

38) 宮澤賢治「雨ニモマケズ手帳」『新校本 宮澤賢治全集』第13巻・上、本文篇、筑摩書房、1997年所収、521～525頁。

地域の青年を対象とした社会教育を目的としたもので、岩手県教育会、稗貫郡教育会、岩手県農会及び岩手県青年団聯合会の共催により実施された。開催期間は26年1月15日から3月末日までで、県の社会教育関係者や花巻農学校、花巻高等女学校の教員が講師をつとめた。ここで賢治は「農民芸術」という科目を担当した。この科目が賢治の発案によるものかどうかはわからないが、その講義のために「農民芸術概論綱要」が書かれたことから見ると、賢治の思い入れには強いものがある。賢治は「綱要」に述べたことを実践するために、同年3月末に花巻農学校を退職し、羅須地人協会を立ち上げたといつてよい。

賢治は、花巻郊外にある宮澤家の別宅を改築してひとり住まいを始めた。1階の和室のひと部屋を板の間に作り替えて集会室にした。1階にはもうひと部屋、床の間と押し入れのついた和室がある。2階の和室は賢治の書斎とした。賢治はフォルケホイスコーレを知っていただろうか。賢治はここに私塾、羅須地人協会を設立し、彼の構想する「農民芸術」を実践する場を実現させた<sup>40)</sup>

建物から近くを流れる北上川へ向かう斜面を下りたところに、2反4畝（24アール）の畑をつくり、賢治は馬鈴薯、白菜、トマト、とうもろこし、花キャベツ（カリフラワー）などを育て、また庭の花壇にはチューリップを植えた。チューリップの球根は横浜の輸入業者から取り寄せた。収穫した野菜やチューリップはリヤカーに積んで町へ売りに行った。当時は花キャベツもチューリップも珍しく、リヤカーも

39) 国民高等学校は、昭和前期に日本各地に設立された。フォルケホイスコーレの邦訳名である国民高等学校の名を付けているが、両者は目的も教育の実態も異なる。

40) 農民が「もっと明るく生き生きと生活をする」ために、賢治が羅須地人協会で実践したいと考えていたことは、「農民芸術」の他に、農民から土壌相談を受け、それぞれの耕地に適した「肥料設計」をすることであった。これは農業生産の向上に直接関わることである。



【写真：上・羅須地人協会の建物（現存）。右端に玄関がある。下・1階の集会室。現在、岩手県立花巻農業高等学校構内に移築されている。松野尾撮影】

賢治が履いていたゴム靴も目新しいものだった。

羅須地人協会の「羅須」にどういう意味があるのかは研究者の間でも意見が分かれているが、一説に「修羅」をひっくり返したのだという説がある。すなわち、醜い戦いや争いが絶えない修羅の場と化した世の中をひっくり返した世界が「羅須」の世界である<sup>41)</sup>。「地人」という言葉も聞き慣れない言い方だが、人はほんらい土と深く関わり合う存在であることを示すために、農民への共感を込めて「地人」という言葉を使ったのではないか。あるいは内村鑑三の『地人論』（1894年）に由来するのであろうか。『地人論』は日本が西洋文明と東洋文明とを総合する位置にあることを地理的及び歴史的に論じた書物である<sup>42)</sup>。平和な世の中を希求する東西両洋の文明の総合者としての地人（農民）が集うところ、それが羅須地人協会である。

1926（大正15）年4月1日付け『岩手日報』に、「新しい農村の建設に努力する 花巻農学校を辞した宮澤先生」という見出しで羅須地人協会のことが報じられた。そのなかで賢治は、記者のインタビューに応じて、まず冒頭で「現代の農村はたしかに経済的にも種々行きつまつてゐるやうに考へられます。そこで少し東京と仙台の大学あたりで自分の不足であつた『農村経済』について研究したいと思つてゐます」と述べ、次いで「農民芸術」について語っている<sup>43)</sup>。東京と仙台の大学あたりでというのが具体的に考えられていたのかどうかはわからないが、賢治が「農村経済」を研究したいと考えていたことは注目してよい。「農民芸術」は「農村経済」と一体のものとして構想されているのである。

「農民芸術概論綱要」は、この「新しい農村の建設」へ向うための理念を簡潔に述べたものである。「序論」から「結論」まで9つの項目に分けて、各項目の要点を記している。項目の見出しを書き出してみると、①「序論…われらはいっしょにこれから何を論ずるか」、②「農民芸術の本質…何がわれらの芸術の心臓をなすものであるか」、③「農民芸術の分野…どんな場合にそれが分類され得るか」、④「農民芸術の

41) 「羅須」はラスキンの「ラス」あるいはラスキンとモリスの初めと終わりの字をとって「ラス」であるとする説もある。ジョン・ラスキン(John Ruskin, 1819-1900)は19世紀イギリスの芸術評論家・思想家で、中世ゴシック芸術を高く評価した。ラスキンから思想的影響を受けたウィリアム・モリス(William Morris, 1834-1896)による「民衆の芸術」運動は、柳宗悦(1889-1961)らによる日本の民芸運動に繋がった。この説に基づいて賢治の羅須地人協会における活動をラスキンやモリスに繋げて論じたものとして、大内秀明編著『賢治とモリスの環境芸術-芸術をもてあの灰色の労働を燃せ』時潮社、2007年、川端康雄『ウィリアム・モリスの遺したもの-デザイン・社会主義・手しごと・文学』岩波書店、2016年を参照。

42) 内村鑑三『地人論』（警醒社書店、1894年）岩波文庫、1942年。

43) 『新校本 宮澤賢治全集』第16巻・下、補遺・資料・年譜篇、筑摩書房、2001年、311~312頁。

(諸)主義…それらのなかにどんな主張が可能であるか), ⑤「農民芸術の製作…いかに着手しいかに進んで行ったらいいか), ⑥「農民芸術の産者…われらのなかで芸術家とはどういふことを意味するか), ⑦「農民芸術の批評…正しい評価や鑑賞はまづいかにしてなされるか), ⑧「農民芸術の総合…おお朋だちよ いっしょに正しい力を併せ われらのすべての田園とわれらのすべての生活を一つの大きな第四次元の芸術に創りあげようでないか), ⑨「結論…われらに要るものは銀河を包む透明な意志, 大きな力と熱である」<sup>44)</sup>

「序論」を読んでみよう。見出しに続けてこう書かれている。「おれたちはみな農民である ずるぶん忙がしく仕事もつらい／もっと明るく生き生きと生活をする道を見付けたい／われらの古い師父たちの中にはさういふ人も応々あった／近代科学の実証と求道者たちの実験とわれらの直観の一致に於て論じたい／世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない／自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する／この方向は古い聖者の踏みまた教へた道ではないか／新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある／正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに應じて行くことである／われらは世界のまことの幸福を<sup>たず</sup>索ねよう 求道すでに道である」<sup>45)</sup>

実に見事な文章である。賢治は、自我の意識は個人から集団、社会、宇宙へと次第に進化する

ると述べている。それは「古い聖者」が教えた道であった、と。

「綱要」は、このままで発表されるものではなく、岩手国民高等学校での講義のための覚え書きとして書かれたものと思われる。「綱要」に基づいて賢治がさらに詳しい内容のものを書くつもりであったのかどうかはわからない。「農民芸術」を論じるのではなく、実践するというのが賢治の気持ちだっただろう。だからこそ賢治は羅須地人協会をつくったのである。

羅須地人協会は、地域の農民の集会場所となることを目指した。そこで娯楽的な催しとしてレコード鑑賞会が開かれた。レコード鑑賞は賢治の大切な趣味で、賢治は花巻でも一二を競うほどレコードを蒐集していた。さらに賢治は楽器の演奏を提案した。賢治はオルガンを購入し<sup>46)</sup> また有志でチェロやバイオリンの練習を始めた。いきなりチェロやバイオリンの演奏では、上手くいくわけがなかった<sup>47)</sup> それでも賢治は、「農民芸術の産者」のなかでこう述べている。「誰人もみな芸術家たる感受をなせ／個性の優れる方面に於て各々止むなき表現をなせ／然もめいめいそのときどきの芸術家である」。そして、「創作止めば彼はふたたび土に起つ／ここには多くの解放された天才がある／個性の異なる幾億の天才も併<sup>なら</sup>び立<sup>かく</sup>つべく斯て地面も天となる」<sup>48)</sup>

賢治が1924年に花巻農学校で上演し、斎藤宗次郎に観てもらった田園劇「ポランの広場」は、その後大幅に書き直されて童話「ポラーノの広場」となった。この作品は、「銀河鉄道の夜」と同様に、賢治の生前には発表されず、推敲を重ねたものが1934年に公表された。

44) 宮澤賢治「農民芸術概論綱要」『新校本 宮澤賢治全集』第13巻・上, 本文篇, 筑摩書房, 1996年所収, 9~16頁。「綱要」は、項目によって文章が難しく、意味が十分に理解できない箇所がある。賢治は難解に書くつもりはなかったのであろうが、化学や物理学、天文学などの自然科学書、哲学や芸術、宗教など色々な本を読んでおり、また、英語やエスペラント語にも通じていた賢治の頭の中には膨大な知識がたまっており、それらが自在に使われ、渾然となって、「綱要」が書かれている。「綱要」を詳細に検討した研究として、フロム／川端康雄訳『宮沢賢治の理想』晶文社, 1984年を参照。

45) 宮澤賢治「農民芸術概論綱要」『新校本 宮澤賢治全集』第13巻・上, 本文篇, 9頁。

46) 賢治は讚美歌集やオルガンを東京の教文館で購入した。

47) 宮澤賢治「セロ弾きのゴーシュ」『新校本 宮澤賢治全集』第11巻, 本文篇所収を参照。この作品は賢治の生前には発表されず、草稿として残されたものが1934年に公表された。

48) 宮澤賢治「農民芸術概論綱要」『新校本 宮澤賢治全集』第13巻・上, 本文篇, 14頁。

「ポラーノの広場」のあらすじ<sup>49</sup>「イーハトーヴォのすきとほった風、夏でも底に冷たさをもつ青いそら、うつくしい森で飾られたモリーオ市」。ポラーノの広場は昔モリーオ市の郊外にあったと伝えられている。そこではオーケストラがあって、誰でも上手に歌えるようになるという。モリーオ市の博物館に勤める私（＝キュースト）は、以前競馬場だったところの建物を借りて住み、1疋の山羊を飼い、毎朝その乳にパンを浸して食事をとった。ある日山羊がいなくなり、私が探していると、山羊を見つけた少年ファゼーロと出会った。お礼を申し出ると、ファゼーロはポラーノの広場を探しているのだと言う。そこで私はファゼーロと彼の友だちのミーロの3人でポラーノの広場探しを始めることにした。しばらくしてファゼーロとミーロが広場を見つけたと言うので3人で行ってみると、その広場では県会議員のデステッパーゴがファゼーロの雇い主のテーマと酒盛りをしていた。私たちが酒を飲まないことにデステッパーゴは腹を立て、ついにデステッパーゴとファゼーロの決闘となってしまう。事なきを得たが、デステッパーゴとファゼーロは失踪した。私がファゼーロの行方を心配していたところに、ファゼーロが帰ってきた。彼はセングード市の革染め工場で働いていたのだと言う。そこで、広場の近くにあるデステッパーゴの倒産した工場（酒を密造していた）を使って、ファゼーロは革加工を、ミーロはハムをつくることにした。栗の加工も計画した。皆は「ポラーノの広場」の開場を水で乾杯をして祝った。そして、「それからちょうど七年たったのです。ファゼーロたちの組合ははじめはなかなかうまく行かなかったのですが、それでもどうにか面白く続けることができたのでした。私はそれから何べんも遊びに行ったり相談のあるたびに友だちにきいたりしてそれから三年の後には

たうたうファゼーロたちは立派な一つの産業組合をつくり、ハムと皮類と醋酸とオートミルはモリーオ〔の〕市やセングードの市はもちろん広くどこへも出るやうになりました」。その後、私は博物館を辞め、今はトキーオ市で、「はげ〔し〕い輪転機の音のとなりの室」で仕事をしている。ある日、私に1通の郵便が届いた。そこには「ポラーノの広場のうた」の「みんなで手に持って歌へるやうにした楽譜」が入っていた。

ハムの製造や皮の加工を楽しく続けられる産業組合（＝協同組合）をつくること。これこそが、宮澤賢治が羅須地人協会を設立した時に岩手日報の記者に語った「新しい農村の建設」のための「農村経済」である。ポラーノの広場は賢治が描いた新しい郷である<sup>50</sup>。

通説の通り、物語の話者である「わたくし」が賢治の分身であると理解出来る。その「わたくし」は、物語の結末の箇所、「トキーオの市のはげ〔し〕い輪転機の音のとなりの室」にいる、となっている。なぜ「わたくし」はモリーオではなくトキーオにいるのだろうか。

この輪転機の音が聞こえる部屋に斎藤宗次郎がいるのではないか。斎藤は1926年に花巻から上京した後、内村鑑三に付き従い、30年3月に内村の最期を看取った。そして、『内村鑑三全集』全20巻の刊行が始まると、33年12月に完結するまで、その編集実務に献身的に従事していた。賢治の分身は斎藤宗次郎のところにいて考えてはどうだろうか。賢治は「ポラーノの広場」を斎藤宗次郎に見てもらいたかったのである。

賢治は、農学校在職中に、「産業組合青年会」と題する詩をつくっていた。この詩には1924（大正13）年10月5日の日付がある。つまり、

49) 最終稿による。宮澤賢治「ポラーノの広場」『新校本 宮澤賢治全集』第11巻、本文篇所収。

50) 大島丈志『宮澤賢治の農業と文学－苛酷な大地イーハトーブの中で』蒼丘書林、2013年を参照。同書は、賢治の時代の産業組合の動きと照らし合わせて、作品解釈を行っている。

この年8月に農学校で田園劇「ポラーノの広場」を上演し、斎藤宗次郎に観てもらった後にこの詩がつくられた。賢治は詩にこう書いている。「……部落部落の小組合が／ハムをつくり羊毛を織り医薬を頒ち／村ごとのまたその聯合の大きなものが／山地の肩をひととこ砕いて／石灰岩末の幾千車かを／酸えた野原にそゝいだり／ゴムから靴を鋳たりもしやう……」<sup>51)</sup>

この詩は発表されないままとなっていたが、賢治は33年9月に原稿を福島県の北方詩人会の編集者へ送り、『北方詩人』33年10月号に掲載された<sup>52)</sup>。同年9月21日に死を迎えることになる賢治は、自らの死が近いことを自覚し、「ポラーノの広場」が完成していないなかで、この詩の発表を決めたことになる。賢治はせめてこの詩だけでも斎藤宗次郎に見てもらいたかった。この詩の発表に賢治の最晩年の思いが込められている。

33年5月には内村鑑三の盟友である新渡戸稲造が盛岡に帰省している。産業組合青年連盟岩手支部の総裁に就任するためである。県民による新渡戸歓迎の様子が『岩手日報』に報じられた。新渡戸稲造の産青連岩手支部総裁就任により、岩手県の産業組合は新たな動きを始めた。従来の地主中心の組合から脱して、農村青年たちが新しい発想で産業組合にかかわり、事業を多様化していく運動へと発展する兆しが見えてきた。産青連の活動に、宮城や岩手の農村で農民福音学校を始めていたキリスト教系の青年たちが積極的に関わるようになったのである。そのことが、「ポラーノの広場」で「たうたうファゼーロたちは立派な一つの産業組合をつくった」と描いた、賢治の産業組合観に反映していると考えられる。

51) 宮澤賢治「産業組合青年会」『新校本 宮澤賢治全集』第3巻、本文篇、筑摩書房、1996年所収。137～138頁。後半の「山地の肩をひととこ砕いて……」については次章(1)で扱う。

52) 『新校本 宮澤賢治全集』第3巻、校異篇、筑摩書房、1996年、330頁及び『新校本 宮澤賢治全集』第15巻、書簡、筑摩書房、1995年、457頁を参照。

### 第3章 農民福音学校の賀川豊彦

#### (1) 岩手の三愛塾と賀川豊彦

賀川豊彦は、『雲の柱』1933(昭和8)年3月号に、こう書いている。「武蔵野でも藤崎盛一氏が一所懸命になつて農民学校を始められた。家が小さいので満員の状態である。……遠くは岩手県、茨城県、群馬県からわざわざ出て来られたのは感謝した。是非来年の二月までには小さい校舎を建てたいと祈つてゐる」<sup>53)</sup>

武蔵野農民福音学校は、1932年に、当時藤崎盛一が住んでいた東京府北多摩郡千歳村字上祖師谷(現・東京都世田谷区)の借地に設立された。賀川が住んでいた松沢村(現・同)からは「約三十町<sup>54)</sup>あるので、歩けばずいぶん遠いが、自転車やリヤカーを使つて連絡をとつてゐる」<sup>55)</sup>とある。

上の賀川の文章に書かれている33年3月の武蔵野農民福音学校に岩手県から参加した人は誰であろうか。まず考えられるのは、岩手県東磐井郡摺沢村(現・一関市)の当時25歳の青年、菅原忠夫(1909-2009)である<sup>56)</sup>。

菅原忠夫は、1925(大正14)年、一ノ関駅から摺沢駅まで開通した鉄道大船渡線の開通式の翌日に同線に乗り、一ノ関駅から東北本線で単身上京した。東京で路傍伝道に出会ったことをきっかけにして教会に通うようになり、洗礼を受けた。29年頃、賀川豊彦や山室民子(1900-1981)<sup>57)</sup>らが関東大震災後の東京で進めていた社会事業活動を知った。菅原は賀川等の活動に深い関心を持ったものの、30年に自身の肋膜炎が悪化して療養のため帰省した。そして菅

53) 賀川豊彦「身辺雑記」『賀川豊彦全集』第24巻、キリスト新聞社、1964年、161頁。

54) 町は尺貫法の長さの単位。1町は約109メートル。

55) 賀川豊彦「身辺雑記」『賀川豊彦全集』第24巻、151頁。

56) 菅原忠夫の親友で、菅原と同じ摺沢村の青柳隆であった可能性もある。あるいは菅原と青柳の二人で参加したかもしれない。以下、詳細は、松野尾裕「岩手県摺沢の三愛塾運動」『雲の柱』第31号、賀川豊彦記念松沢資料館、2017年所収を参照。

原は、東磐基督教青年会を組織するなどして、摺沢村に「土着」する決意をした。32年に同郷の加藤カネミと結婚し、翌33年春に自宅を新築した。この自宅の玄関に、「三愛塾舎」と書かれた栗の木の板でつくられた小さな表札を掲げた。菅原はまた、産青連岩手支部総裁の新渡戸稲造の呼びかけに応じて「産青連摺沢支部」を結成し、幹事長に就いて地域の農業青年のリーダーとしての活動も始めた。



【写真：菅原忠夫の自宅兼三愛塾舎。出典：菅原忠夫『三愛塾の碑—ある口百姓の手記』43頁】

菅原は後年の回想のなかでこう述べている。新宅は、「私の希望もあって二階建ての一見校舎風の建物で、一階は五室、二階三室で窓は全部ガラス戸で屋根は木羽葺であった。入居後の利用は、二階は、読書室、集会室、一室は泊る人が利用する部屋となった。一階の奥座敷は冬期間の裁縫塾とした。外、食堂と居間以外は私室に利用した」。そして、「野菜だけでも宅地近くで栽培しようとして開墾して各種野菜を作ったが、うまく育たない。誰か農業補習学校で土壌検定をしたら、強酸性土壌と判り、雑木を焼いて灰を作って入れたり、道路に出て馬糞を拾っ

て（当時は荷馬車が多かった）施したりして、漸く日常の野菜を得ることができた。「月日がたつに従って、青年達の出入が多くなり、農家の休日を当て、『農談会』と称して本を教材として農林問題と協同組合を中心に討論を交して研修に励んだ。又有識者を招いて『一夜講習会』を開き、遠方の方は泊って朝早く帰宅する人、又は私の作業を手伝う人、等さまざまであった」<sup>58)</sup>

菅原忠夫が摺沢村で三愛塾をつくったのが1933年春のことである。それは、宮澤賢治が羅須地人協会で取り組もうとしたことを彷彿させるものがある。賢治は同年9月に死去しており、菅原忠夫の活動を知っていたかどうかはわからないが、以下に述べる通り、知る機会があったと考えられる。



【地図：岩手県全図。出典：<http://uub.jp/47/iwate/map.html>】

まず、賢治はその頃、東北碎石工場に勤めていたからである。東北碎石工場は東磐井郡東山町松川（現・一関市）にあった。大船渡線の陸中松川駅のあるところである。陸中松川駅の隣が摺沢駅であった<sup>59)</sup>。東北碎石工場は、大船渡

57) 山室民子は救世軍の山室軍平・機恵子夫妻の長女で、彼女も救世軍で活躍した。山室（旧姓佐藤）機恵子（1874-1916）は岩手県稗貫郡川口村（現・花巻市）の生れで、その生家は宮澤賢治の生家のすぐ近くである。菅原忠夫はおそらく同郷人として山室機恵子や民子を知っていただろう。

58) 菅原忠夫『三愛塾の碑—ある口百姓の手記』あづま書房、1992年、42～43頁。

59) 現在は、陸中松川駅と摺沢駅の間に梶鼻溪駅と柴宿駅がある。

線の開業に合わせて、この地域で産出される石灰岩の粉末を石灰肥料（酸性土壌の中和剤）とし、鉄道輸送することで、事業化された会社である。賢治は土壌・肥料の専門家として、その知識を買われ、製造技術者兼普及要員としてここで働くことになった。賢治は1930年9月に大船渡線で松川へ行き、東北砕石工場を初めて訪ねた。砕石場に立った賢治は、1924年につくった詩「産業組合青年会」のなかで書いた、「山地の肩をひととこ砕いて／石灰岩末の幾千車かを／酸えた野原にそゝぐことがまさに実現したかに思っただろう。賢治が松川を訪ねた1930年に、菅原忠夫は病気療養のため摺沢に帰省し、快復の様子を見ながら、東山、摺沢、千厩せんまなど東磐地域の有志たちとキリスト教青年運動を始めていたのである。

賢治が菅原忠夫を知る機会はもうひとつあった。それは、賢治の親友、島栄蔵(1903-1945)を介してである。島栄蔵は菅原忠夫とも親交があった。島は賢治の生家から数軒離れた味噌・醤油を製造・販売する家に生れ、一関中学校(現・岩手県立一関第一高等学校)在学中に一関教会で洗礼を受け、花巻に戻って花巻教会(現・日本キリスト教団花巻教会)で熱心に活動し、日曜学校の校長をつとめるなどした。島は斎藤宗次郎とも親交があった<sup>60)</sup>

島栄蔵は、路傍伝道に熱心に取り組んだ。毎週木曜日夜は三益社製糸工場の前で説教をし、女工たちのなかにその話を聞く者が現れた。そのひとりが豊子という千厩から製糸工場へ働きに来ていた女性であった。彼女は1927年、16歳の時に花巻教会で洗礼を受けた。島は豊子と結婚する気持ちを持っていたが、両親の反対で悩んでいた。島の悩みに菅原は「歳下の私では力になり得ずにただ励ましつつ加禱する外なかった」。31年10月、栄蔵が28歳、豊子が20歳を迎え、二人は結婚の願いを叶えることが出

来た<sup>61)</sup>。そして、菅原はこう回想している。「後日私が島家に一泊した折りに、彼は私の友達で変り者が居るから、明日私が案内するから会ってゆけという。私は思った、お互いに世間の目では変り者と見られて居るのに、と。彼は時折、花巻駅前一人で路傍伝道をしている熱烈なキリスト信者であった。その翌日は何かの都合で実現しなかったが、農村問題に熱心な私を宮沢賢治と会談させれば得るところがある、との配慮であった。(島氏と宮沢氏は親友であったと近年知った)」<sup>62)</sup>

宮沢賢治と菅原忠夫の対面は実現こそしなかったが、島栄蔵が見るところでも、宮沢賢治と菅原忠夫の両者が考えていることに共通するものがあつたのである。島は菅原が三愛塾や農民福音学校、そして産青連の活動を始めたことを当然知っていたから、そのことを島が賢治に伝えたと考えてもおかしくはない。

菅原忠夫は東磐地域で農民福音学校の開催を実現させた。1932年に第1回東山農民福音学校が摺沢家政女学校(現・岩手県立大東高等学校)を会場にして開催された。摺沢家政女学校は、金信平・ふさ夫妻が地域の女性の健康な家庭生活を実現するために設立した私立学校で<sup>63)</sup>、金夫妻は菅原忠夫らの運動の当初からの支援者であった。三愛塾舎が出来た翌33年は、第2回東山農民福音学校が三愛塾舎を会場にして開かれた。農民福音学校には藤崎盛一、斎藤由一、山岸晃、大崎治部、升崎外彦らが講師として訪れた。

33年3月3日、昭和三陸地震が起こった。翌34年は天候不順による記録的な大凶作となった。賀川豊彦が摺沢村を訪問したのは、賢治が「サムサノナツハオロオロアルキ」と書い

61) 同上書、106～109頁。

62) 菅原忠夫『三愛塾の碑-ある口百姓の手記』48～49頁。

63) ゆかいな仲間テンダーズ(旧大東町教育委員会主催町民大学男女共同参画講座受講者有志)編『郷土を拓いた女性-金ふさ先生』ゆかいな仲間テンダーズ、2015年を参照。

60) 島栄蔵については、雑賀信行『宮沢賢治とクリスマス チャン 花巻篇』に詳しく論じられている。

た通りとなった34年8月11日である。この日賀川は大崎治部と長男純基と共に摺沢駅に着いた。

菅原忠夫の回想より。「駅に村の有志達も出迎えにゆき、丸久旅館で休息して、産業組合にて村の指導者達と懇談のあと、組合玄関前にて記念写真を撮った。……夜は「東座」にて「農村更生の原理」の演題にて約四時間に亙る熱弁にて大衆を魅了した。聴衆は近村は勿論、一の関、気仙沼方面からも来たとして、会場整理しても中に入りきれずに窓にすがりついて聞く人もある有様だった。先生の講演は、黒板にザラ紙を重ねて張り、それに毛筆で大きく要点を書きながらの熱弁で判り易く、協同組合組織を強化充実して、農村を改革して更生せよ、と力説された。その夜は旅館ではなく、塾舎に青年達と宿ると仰言られ、私達はあわてて近隣から夜具を借り集めて来て設営した次第だった。翌日は早朝に「イエスの友会東磐支部」の発会式が行われ、その急造の食堂で青年達と朝食をとり、次の予定地に出発されて行った」<sup>64)</sup>

賀川豊彦の摺沢村訪問が三愛塾に集う青年たちに深い感銘をもって受け止められたことは、一人の青年が書いた日記にも示されている。日記を書いたのは三浦所太郎(1913-1987)という、菅原忠夫と同じ摺沢村に生れた、当時20歳の青年である。三浦の日記より。「この日のため私達はどんなに祈ったか知れない。賀川豊彦先生は気仙郡の米崎村〔現・陸前高田市〕に摺沢を通過すると云うのであるから。三回までも手紙ではねつけられたけれども私達の熱禱がきかれてか電報にて摺沢に立寄る旨伝えてきた。電報を受け取ってから三日間しかなかったために十分な準備は出来なかった。十一日の日は家の仕事はとて忙しいのであるけれども、朝から三愛塾舎に行つて準備をする。無論この三日間は同志の誰もが不眠不休で活動した。当日私は塾舎の準備、和賀〔辰雄〕兄は講演会場

東座の準備、青柳〔隆〕兄は自転車各地への広報連絡係と分担された。……〔翌日〕塾舎の夜は静かに明け、賀川先生一行の元気な顔を見ることが出来た。六時の汽車で米崎村へ行くので大部多忙である。イエスの友会東磐支部発会式を行う。賀川先生からいろいろと友会について話さる。朝食後直ちに自動車で停車場にむかう。停車場で先生は私に手をかけて「しっかりやってくれ給え。私のところに泊りに来給え。」と世界的偉人の先生はにこにこ云ってくれる。感激にみちた私たちを残して汽車はたった。かたいたい握手。先生程強い握手をして貰ったことがない」<sup>65)</sup>

三浦所太郎は、農民福音学校を訪れた升崎外彦<sup>66)</sup>から砂鉄川<sup>67)</sup>で洗礼を受けた。

1934年の暮、賀川は降誕祭を岩手で迎えた。賀川は、『雲の柱』1935年2月号に、こう記録している。「クリスマスは東北で送つた。サンタクロースよ北へ行けと、朝日新聞が書いてゐたので私は北で送る決心をして、無理をして北へ行つた。十二月二十三日の晩は、盛岡市長の主催で講演をした。そして二十四日は、岩手県上閉伊郡遠野町の一般市民のために講演をした。約八百人位の聴衆が寒さを犯して来集した。愉快なクリスマスの前の夜を送つた。この日、私が社会奉仕の生活に這入つて恰度満二十五年の記念すべき夕であつた」<sup>68)</sup>

明けて35年1月26日から30日まで賀川は

65) 三浦所太郎遺稿集編集委員会編『三浦所太郎遺稿集 丘の家の囲炉裏から』三浦恵子、1987年、235~236頁。

66) 升崎外彦(1892-1975)は救世軍出身の牧師。1927年に和歌山県日高郡南部町(現・みなべ町)に労禱学園を設立した。

67) 砂鉄川は北上川の支流で狛鼻溪を流れる。

68) 賀川豊彦「身辺雑記」『賀川豊彦全集』第24巻、198頁。賀川は東北で聞いた話として、こんなことも書いている。「福島県南会津では、新しいゴム靴が買へない人が多いので、ゴム靴を修繕して廻つてゐる篤志なキリスト教信者があることを私は聞いた」。同書、199頁。この話は、宮澤賢治が「産業組合青年会」の詩のなかで「ゴムから靴を鋳たりもしやう」と願つたことと重なり合う。註51を参照。

64) 菅原忠夫『三愛塾の碑-ある口百姓の手記』57頁。

再び岩手を訪問した。一ノ関駅からまず東磐井郡興田村(現・一関市)へ行き、小学校の会場で講演をした。「摺沢村のイエスの友から七人位の者が或は徒歩で、或は自転車でやつてきてゐたので、その晩は村を復興する方法についてゆつくり話した」<sup>69)</sup> 翌27日は岩手郡沼宮内町(現・岩手町)と二戸郡福岡町(現・二戸市)、28日は九戸郡軽米町、29日は上閉伊郡遠野町(現・遠野市)と西磐井郡一関町(現・一関市)と回って講演をし、30日午前は一関教会で聖書講義を行い、東京へ戻った。

35年2月、三浦所太郎に武蔵野農民福音学校で学ぶ機会が訪れた。2月11日から27日までの期間で武蔵野農民福音学校が開催された。三浦の日記より。「武蔵野農民福音学校へは自分では行けぬとあきらめて居たが、青柳兄の力によって行ける様になり感謝の外はない。彼青柳兄からは何時も物質的に精神的に助力される。彼の燃ゆる信仰と奉仕のしかたには私は頭を下げる。既に和賀兄は自転車で東京迄行くとして出発している。衣類を持たない自分は皆んなから借りる。自分は当分それでよいと考えている。今日は午前中木炭の木を背負うて運ぶ。午後塾舎の菅原兄より奉仕団<sup>70)</sup>の現況を色々聞いてくる。上京してからの都合があるため、夜、「一寸行って来るよ」と車窓から菅原、青柳、小野寺の諸兄に別れを告げ一関に向う。一関にて吉田新吉兄と一緒に教会の人達に見送られて出発した。翌日上北沢の賀川先生宅に寄る。先生の家はあまりにも貧弱なのに驚いた。これが世界の偉人とよばれる大人物の生活している所かと思うと自然と頭がさがった。先生に面会し、一緒に昼食を御馳走になって自動車で先生と秘書の吉本健子さん、山岸さんと僕達二人とが武蔵野農民福音学校に行く。武蔵野農民

福音学校は小さな百姓家らしい建物であった。和賀兄は同夜遅く自転車で無事着き元気であった。「二週間の武蔵野の学びと生活は僕にとって楽しいものであった。そして農村のため教わる点が多く、東北のため死する生命と云い乍らも使命の如何に重大なるかに自分乍ら驚いた」<sup>71)</sup>

この時摺沢から東京まで自転車でいったという和賀辰雄はその後、江東消費組合で働くことになり、また青柳隆は武蔵野農民福音学校で働くことになった。

菅原忠夫は摺沢村に残り、摺沢産業組合で仕事をすることに決めた。それは、組合長の佐藤正吉が「羽織り袴の正装」で菅原を訪問し、こう懇請したからである。「翁曰く、「賀川先生の講演の通り、貧乏から起上り、豊かな村にするには産業組合より外にない。その組合に農家の信用を集めるには、組合員の教育が第一である。今は各部落に農家組合<sup>72)</sup>ができたので、そこを巡って組合事業に協力させる人が必要である。その教育係として、貴方が是非引受けて、組合を助けてください」<sup>73)</sup>

賀川豊彦は全国各地で開催された農民福音学校を訪ね、さまざまな農村の実情を見聞した。その経験に基づいて、『農村更生と精神更生』(教文館、1935年)を著した。

賀川は同書の「序」の冒頭に、「『心田を耕さざれば田を耕すことが出来ない』と、よくもまあ二宮尊徳先生が云つてくれたものだ」と書き、次のように述べている。「土を耕す場合に技術が要る。土の測定、土の改良、品種の統一、品種の改良、一つとして精神的努力に俟たないものはない。土の仕事を唯物的なものだと思つてゐる間は、大きな間違ひをする。況んや最近の土壤学の発達、発生学の進歩、肥料化学

69) 同上書、200頁。

70) 賀川の提案により1934年11月13日に東北凶作基督教聯合奉仕団が結成された。メソヂスト教会監督の赤澤元造が会長に就いた。岩手県では遠野教会が全国から寄せられる物資等の受け入れの中心となり、摺沢の三愛塾も協力した。

71) 三浦所太郎遺稿集編集委員会編『三浦所太郎遺稿集 丘の家の囲炉裏から』240～241頁。

72) 農家組合は共同水利や畔補修などのため設立された。

73) 菅原忠夫『三愛塾の碑—ある口百姓の手記』61頁。

の進展等によつて、農業は人間の意識的開発を俟たなければ、不可能事となつて了つた。農業を唯物的にのみ考へる時代はもう過ぎ去つた。生物化学としての農業は、生命の発展の方向に従つて不思議な未来を持つてゐる。その不思議な未来の扉を開くものは、心の鍵による。魂を開墾することなくして、山野を開墾することは出来ない。……充分科学的であり得て、初めて土を完全に愛することが出来る。土を愛すると称しても、非科学的農民は郷土を蹂躪するものである。然し農業科学だけを知つて社会科学を知らざる者は、農産物が人間のために生産せられることを忘れてゐるのである。資本主義末期に立つてゐる我々は、農業科学を熟知すると共に社会科学をよく理解せねばならぬ。協同組合科学の必要はそこに生まれる。然し、協同組合運動は、宇宙の神が我々に与へた良心運動を離れて成立するものではない。日本の危機は良心の危機である。道徳的頹廢は、産業組合運動にも潜り込んでゐる。どうしても、精神更生を基礎としなければ、農村の更生はあり得ない」<sup>74)</sup>

賀川が農民福音学校で繰り返し説いたのは「土を愛し、人を愛し、神を愛する」、すなわち「三愛」である。賀川豊彦が摺沢村の三愛塾に贈った書が三浦所太郎の自宅に保管されている。扁額に仕立てられたそれには、「愛土 愛隣 愛神 一九三四・七・六 為三愛塾 賀川豊彦」と書かれている<sup>75)</sup>

## (2) 胡桃の郷

賀川豊彦は小説『乳と蜜の流るゝ郷』（改造社、1935年）のなかで、主人公の「田中東助」が、郷里の福島県の小さな村から出て長野県上田へ行き、「浦里村信用販売利用購買組合」で

仕事を見つけ、ゴム靴を履いて鮮魚の行商をしながら地域の様子を学んでいく姿をこう描いている。「東助は、毎日、さかなの行商に出ることを、楽しみにするようになった。それは神科村に行くときとメンヨウを飼うて、ホームスパンをやっている。農村経営の方法が、だんだんわかつてき、和村にまで行くと、クルミを植え、ヤギを飼うて、農村経営を立体的にやることによつて、負債整理を、完全にやりつつある状態が、日一日明らかになってきたからである」<sup>76)</sup>

賀川が農民福音学校において農業再建の方法として力説したのが、「立体農業」である。それは、平地における米作中心の農業を、山岳地や傾斜地を利用する農業へと転換することを主張したものである。賀川の説明を要約すれば、次のようになる<sup>77)</sup> 基本は種実樹木栽培と家畜飼育を組み合わせることである。まず傾斜地を開墾し、栗や胡桃を育てる。それと共に鶏、兎、豚などの小家畜を飼育し、その糞尿を肥料とし、肉をハム等に加工する。次いで、山羊や乳牛を飼育し、その乳でチーズやバターをつくる。緬羊を飼育し、その毛を用いてホームスパンを行う。養蜂により蜂蜜を採る。また、溪川で鯉や虹鱒を飼育し、魚を自給する。梅や無花果、枇杷、蜜柑、桃などの果樹を植え、果実をジャムなどにして保存する、等々である。

賀川はなぜ立体農業を主張したのか。それは、「現在の農業は……〔農民が〕食物を生産する生業をつづけながら、食へないという立場に置かれてしまった」からである。賀川はいう。「立体農業といふ言葉が、世人の間に用ひられるやうになつたのは最近のことであるが、字句の問題は別として、私は立体農業のことを『食へる農業』とも云ひたい」<sup>78)</sup>

農民福音学校で立体農業の実践を指導したの

74) 賀川豊彦『農村更生と精神更生』（教文館、1935年）『賀川豊彦全集』第12巻、キリスト新聞社、1963年所収、139頁。

75) 三浦所太郎については、松野尾裕「三浦所太郎と東北農業協会・東北ミッション」『愛媛経済論集』第36巻第2・3合併号、愛媛大学経済学会、2017年所収を参照。

76) 賀川豊彦『乳と蜜の流るゝ郷』（改造社、1935年）復刻版、家の光協会、2009年、36頁。

77) 賀川豊彦・藤崎盛一『立体農業の理論と実際』日本評論社、1935年。

78) 同上書、27頁。



【写真：賀川豊彦と藤崎盛一。藤崎は各地の農民福音学校で立体農業を指導した。出典：藤崎盛一・農民福音学校編『農民福音学校』巻頭】



【写真：小井田立体的農業研究所（岩手県九戸郡九戸村，小井田重雄氏経営）で収穫された手打ち胡桃。2016年産。松野尾撮影】

は藤崎盛一（1903-1998）である<sup>79）</sup>種実類として特に重要なのは栗と胡桃である。とりわけ胡桃は栄養価が高く、木材としての利用も可能であることから、農民福音学校で栽培が奨励された。胡桃にはいくつかの品種とその変種があるが、日本原産の鬼胡桃や姫胡桃ではなく、「朝鮮胡桃」「菓子胡桃」「手打ち胡桃」と呼ばれる品種が有望種とされた。

藤崎は胡桃の栽培をこう指導した。「胡桃は寒冷の気候を好むが、寒暖いづれに対しても抵抗力が強く、北海道のやうな寒地にも生育結実し、九州もいゝ。……我国の随所で胡桃の栽培

の可能であるから、自家用としても、有望種を植ゑるのが望ましい。胡桃の発芽温度は十度、開花温度は十二度、果実の成熟に適する温度は十八度といはれている。……理想的土質としては、排水が良く、相当に湿気があり、表土の深い砂質壤土或は礫質壤土がいゝが、湿気も必要であるから、粘質を帯びた土質が最上だと云ふ人もある。……胡桃の栽培は土地利用を高めるためのものであるから、一般作物には不利で胡桃に適する傾斜地、荒地、河川の堤防等を選びたい。……定植の時期は、秋の落葉後十一月から十二月、或は春二、三月の頃がいゝ」<sup>80）</sup>

藤崎が戦後に著した『くるみの栽培』（新約書房、1951年）は、全127頁の小さな本であるが、そこには藤崎が四半世紀にわたって胡桃栽培に取り組んできた成果が盛り込まれている。そのなかで藤崎は、胡桃栽培を奨励するに当たり、「くるみの種子は主として和村農業協同組合、荒井仁三郎、清水義晴氏等に仰い」<sup>81）</sup>だと述べている。

『和村誌』（東部町教育委員会、1963年）によれば、長野県小県郡和村（現・東御市）における胡桃栽培は、明治40年頃に軽井沢に住む外国人が同村に胡桃を買ひ求めるようになったことに始まる。当時、和村にあった胡桃（在来種）の成木は60本ほどで、20石（450貫）<sup>82）</sup>程度が販売され、「くるみというものが、明治41年、はじめて商品となつて現金化された」。それに前後して小県郡豊里村（現・上田市）の荒井仁三郎や北佐久郡中佐都村（現・小諸市）の池田清作らが軽井沢の外国人から分けてもらった胡桃（西洋種）を用いて、胡桃栽培を始めた。こうした時に賀川豊彦による提案があったのである。『和村誌』には次のように記述されている。

80) 賀川豊彦・藤崎盛一『立体農業の理論と実際』、90～93頁。

81) 藤崎盛一『くるみの栽培』新約書房、1951年、56頁

82) 石と貫はそれぞれ尺貫法の体積、重量の単位。1石は約180リットル、貫は3.7kg。

79) 藤崎盛一『農民教育五十年-乳と蜜の流る、郷を求めて』豊島農民福音学校出版部、1976年、藤崎盛一・農民福音学校編『農民福音学校-農民福音学校50周年記念誌』立農会、1977年を参照。

「大正四〔1915〕年、和信用組合長深井功氏<sup>83)</sup>が、軽井沢で、賀川豊彦氏と会談の際、氏から「菓子ぐるみは栄養度が高く、国民の保健上非常に尊いもので、将来、需要も増そうし、農家にはぜひ一本づゝほしいものである」ときかされた。そこで、深井氏は、これを奨励すべく、大正四年秋、大正天皇即位御大典記念として、組合から和村全戸に苗木一本ずつを配付し、これが奨励をはかった。そして、組合がぐるみの集荷をはじめたのは昭和六〔1931〕年からである」。1932年に当時和小学校に在籍していた12歳の少年が村内の全戸を訪ねて胡桃の本数と大きさを調査した。その記録が残されている。それによると、1932年現在、和村には胡桃の大樹（目通り<sup>84)</sup> 周囲120 cm以上）が50本、中樹（同40 cm以上120 cm未満）が918本、小樹（同20 cm以上40 cm未満）が299本、合計1,278本、1戸当り1.5本である。生産量は2,000貫ないし3,000貫程度であったと推測される。戦後1955年に、村役場と農協により胡桃栽培状況に関する共同調査が行われた。それによると総本数が6,517本、1戸当り7本であり、生産量は1万4,498貫である。同誌は、「ぐるみは、蚕繭、米、牛乳、麦類、鶏卵につぐ産額を示し、和における重要生産物の一つに発展している」と記述している<sup>85)</sup>

和村は現在東御市の一部であるが、東御市は日本で最も優れた胡桃の産地となっている。

藤崎盛一はいう。「賀川豊彦先生とともに私もぐるみの栽培を二十数年唱導してきたのは、単なる副業や、換金作物としてでは決してなかつた。まず「聖書」のしめす農業の実践と

して、「生命の樹」をもつて大地をおおいつつもうとするのである。そこに農民の生活確立がある。国土計画の安全性がある。また全人類の安寧も見出される。くるみはもう異国の丘に実をむすぶ樹ではなくなつた。新しいエデンの園はすでに賀川先生によつて最初の鍬がうちこまれたのである」<sup>86)</sup>

農民福音学校で奨励されたもうひとつが小家畜の飼育である。そのなかでとりわけ山羊が奨励された。藤崎はこう説明している。「山羊は外国では貧乏人の友と云はれて、農家の暮しを助ける立派な生産者となつてゐる。かう云ふと、日本人の耳には不思議に響くであらう。といふのは、日本では山羊は娯楽として飼はれてゐるのが普通で、農家の副業としては稀にしか飼はれてゐないからである。……もつと家畜を取り入れるには、さしむき山羊などが手頃である。山羊は家畜中最も壮健で、気候の影響を受けることが少いから、至る処で飼育が出来る。非常に粗食に耐へ得る動物で、飼料の範囲が広いために飼育も容易である。日本のやうに山岳の多い国では、一番有利である。……山羊の生産物は、肉、毛、皮、乳、糞尿等である。三ヶ月乃至四ヶ月の仔山羊の肉は美味しくて、鶏肉に劣らない。しかし牡の肉は、去勢したものでなければ、悪臭があつて食へない。アンゴラ類、カシミヤ類等の毛は緬羊の毛に劣らない。皮は鞣せば色々の革工品の原料となる。キツトと称する靴革は、仔山羊の皮で作られたものである。糞尿は立派な肥料になる。山羊乳は、牛乳と違って、結核菌の心配がなく、生のみ、飲用出来る。その上、脂肪含有率が高く、脂肪球が小さくて人乳に似てゐるから、牛乳のやうに子供の腸を悪くすることがない。また、煮沸の必要もないから、ビタミンが完全に保たれ、従つて食品としての価値が頗る高い」<sup>87)</sup>

83) 深井功は、有限責任和信用組合（後、和信用販売購買利用組合）が1903（明治36）年に設立されてから43（昭和18）年に解散するまで、41年にわたり組合長を務め、長野県の産業組合運動に力を尽くした。

84) 目通りは、立っている人の目の高さの位置で、立ち木の周囲長をはかる基準。5尺（約1.5メートル）程度。

85) 和村誌編集委員会編『和村誌 現代編』東部町教育委員会、1963年、83～96頁。

86) 藤崎盛一『ぐるみの栽培』5頁。

87) 賀川豊彦・藤崎盛一『立体農業の理論と実際』124～125頁。



【写真：上・武蔵野農民福音学校の農場。建物は左から乳牛舎，山羊舎，豚舎。下・日本農民福音学校での畜肉加工実習。出典：藤崎盛一・農民福音学校編『農民福音学校』巻頭】

農民福音学校から畜肉加工の専門家が誕生した<sup>88)</sup> 御殿場農民福音学校高根学園の勝俣喜六(生年不詳-1977)である。指導をしたのは大木市蔵(1895-1974)である。大木は横浜でハムやソーセージを製造・販売する店舗<sup>89)</sup>を経営するかたわら、東京帝国大学農学部畜産学講座が主催した「駒場畜産研究会」で畜肉加工実習の講師を務めるなど、大正期から昭和前期における日本の畜肉加工指導の第一人者であった<sup>90)</sup>

88) 以下、詳しくは、松野尾裕「御殿場農民福音学校と食肉加工品製造の実践」『愛媛経済論集』第34巻第2号、愛媛大学経済学会、2014年所収を参照。

89) 大木ハムは現在、横浜元町で営業している。

90) 大木市蔵の著した畜肉加工書として、東京帝大畜産学教授田中宏との共著、田中宏・大木市蔵『実用豚肉加工法附製革法』西ヶ原刊行会、1933年及び、愛知県猿投農学校での講義録で、同校長鈴木洋一との共著、大木市蔵・鈴木洋一『実験豚の屠殺解体加工法』愛知県猿投農学校同窓会、1939年がある。

大木は賀川豊彦の依頼を受けて、1932年から農民福音学校で畜肉加工の指導を行った。

大木は愛知県の農学校で行った実習指導の記録のなかにこう書いている。「農村に於ける養豚業に対しては従来の如く単に廃棄農産物の飼料化糞尿の肥料化のみを目的とせず之が加工又は半加工によりて経済上の利益を一層高むると共に其内臓及び脂肪等の利用によりて農村民の栄養を改善し活動の源泉を養ふことが出来る」<sup>91)</sup>しかし、いま直ちに個々の農家がハムやソーセージづくりを始めることは技術的にも資金的にも難しいから、大木はこう提案した。「加工組合を組織して行へば決して不可能のことで無い。特に加工品の良否は其原料たる豚の肉質と密接なる関係を有し肉質の如何は飼料の種類によりて左右さるゝものであるから加工組合員たる各農家が此点を充分理解し統制ある飼養管理を行つたならば必ず優秀なる加工豚の産出を見従つてこれを原料とせる加工品の優良なることは火を見るよりも明である」<sup>92)</sup>

武蔵野農民福音学校で大木市蔵から畜肉加工を学んだ勝俣喜六は、1934年秋に御殿場へ帰った。そして、御殿場養豚加工組合が設立され、勝俣がリーダーとなって、ハムやソーセージ、

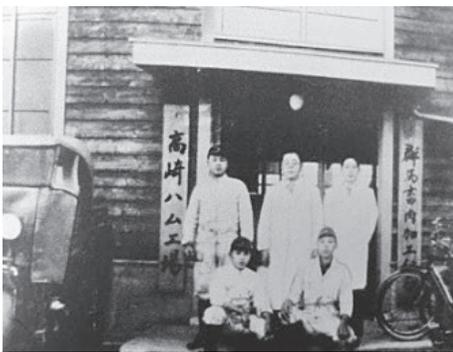


【写真：御殿場農民福音学校高根学園の建物(現存)。現在、御殿場市営東運動場に移築されている。松野尾撮影】

91) 大木市蔵・鈴木洋一『実験豚の屠殺解体加工法』、3頁。

92) 同上書、3～4頁。

ベーコンの製造が開始された。それらの製品は「富士ハム」の名で出荷されるまでになった。しかしながら、数年後には戦時体制による経済統制が強まり、家畜飼料規制が強化され、原料豚の確保が困難となり、富士ハムの製造は事実上停止した。そうした時に、勝俣は、1937年に群馬県に設立された群馬畜肉加工組合（現・JA 高崎ハム）に製造技術指導者として招かれた。これは、同組合から製造技術指導者の紹介を求められた大木市蔵が勝俣を推薦したことによるものである。大木の回想によれば、「賀川先生にお目に掛り、群馬県の熱意を伝え、此の仕事に勝俣君を割愛下さる様お願いし、承諾を得た」<sup>93)</sup>のであった。こうして、「高崎ハム」が誕生した。大木は、畜産農家によるハム製造についてこう述べている。「自分の生産物は自分で加工すべきである。資本主義的になりたつもの一切が、農民の手からとんとんきりはなされるが、農民は、自らの手でこれをまもりぬかなければいけない。豚は容易に農家が飼養出来るし、これを農民が加工し半分を輸出するほどに発達さすべきである。そういう意味から豚肉



【写真：創立当時の群馬畜肉加工組合。後列左が勝俣喜六、中央が大木市蔵。大木と職員4名による出発。出典：『高崎ハム創業二十年史』8頁】

加工は、あくまで農民自身の手で完成すべきだ」<sup>94)</sup>

この大木市蔵の畜肉加工の考えは、賀川豊彦の立体農業思想と共鳴し、農民福音学校での指導を通して勝俣喜六に引き継がれ、御殿場養豚加工組合を経て群馬畜肉加工組合に根を下ろしたのである。

## む す び

1926年4月に宮澤賢治の羅須地人協会設立のことが、『岩手日報』に「新しい農村の建設に努力する 花巻農学校を辞した宮澤先生」と報じられた時、その記事のなかで、記者のインタビューに応じて賢治はまず、「現代の農村はたしかに経済的にも種々行きつまつてあるやうに考へられます。……自分の不足であつた『農村経済』について研究したいと思つてゐます」と語った。そして、童話「ポラーノの広場」のなかで、賢治はファゼーロにこう語らせた。「あの工場をこんどはみんなでいろいろに使つて〔で〕できるだけお互のいるものは拵えやうといふんです」。「まあ別に新しい資本がかゝるわけでもなし革をなめしたりハムを拵えたり、栗を蒸して乾かしたり、そんなことをいろいろやろうといふんです」<sup>95)</sup> 賢治が研究したいと考えた「農村経済」とは、産業組合（協同組合）による畜産・畜肉加工であった。そして、『岩手日報』のインタビューで賢治はその「農村経済」の研究を「東京と仙台の大学あたりで」したいと語っており、「ポラーノの広場」では「私は……相談のあるたびに友だちにきいたりして」と書かれている。農民福音学校におけるハムづくりの実習を賢治は知っていたか、あるいは知りたいと思ったのではないかと考えることは十分に可能である<sup>96)</sup> 当時、農民による畜肉加工や皮加工の実践を構想し、指導した人は限られ

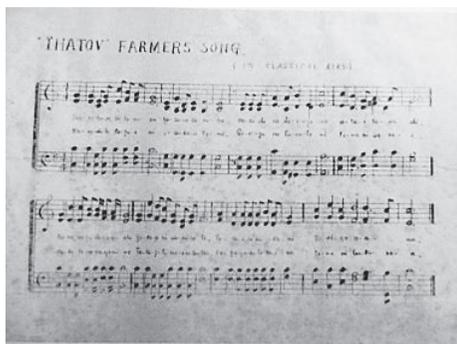
93) 大木市蔵「創業二十周年を回顧して」群馬畜産加工販売農業協同組合連合会編『高崎ハム創業二十年史』群馬畜産加工販売農業協同組合連合会、1958年所収、20頁。

94) 同上書、24頁。

95) 宮澤賢治「ポラーノの広場」『新校本 宮澤賢治全集』第11巻、本文篇、116頁。

た。賀川豊彦や藤崎盛一らによる農民福音学校における有畜農業の奨励と、大木市蔵がそれにおける協力して畜肉加工実習を指導し、そこから日本初の農民組織によるハム製造事業を成功させたことは上に述べた通りである。

ポラーノの広場は協同組合である。協同組合で働く者たちで歌われるようになったという「ポラーノの広場のうた」の楽譜が印刷され、ファゼーロから「わたくし」に送られてきたところで物語は終わっている。その楽譜を彷彿させる謄写版で印刷された賢治自筆の楽譜「“IHATOV” FARMERS’ SONG(イーハトーヴォ農民の歌)」<sup>97)</sup>が、1982年に発見された。賢治の教え子が保管していたものである<sup>98)</sup>。この楽譜には、明治期につくられた讚美歌集、『讚美歌』(教文館、1903年)に収められている「448番 いづれのときかは」の曲に、賢治自作の歌詞がローマ字で書き込まれている。



【写真：楽譜「“IHATOV” FARMERS’ SONG」。出典：宮澤清六・他編『写真集宮澤賢治の世界』p.96】

96) 賢治の童話「フランドン農学校の豚」(1934年公表)は、豚の屠殺を題材にした話で、人間の身勝手さと残酷性が描かれている。賢治は屠畜を嫌ったのではなく、むしろ屠畜が正しく理解され、畜肉加工を「楽しく続けられる」ことを願ったのである。宮澤賢治「フランドン農学校の豚」『新校本 宮澤賢治全集』第10巻、本文篇、筑摩書房、1995年所収。

97) 賢治の自筆では頭文字Iに「-」が付く。エに近いイの発音を示すと考えられる。

98) 宮澤賢治「ポラーノの広場のうた」『新校本 宮澤賢治全集』第6巻、本文篇、筑摩書房、1996年所収、354~356頁。『新校本 宮澤賢治全集』第6巻、校異篇、筑摩書房、1996年、225~228頁を参照。

- 1 つめくさ灯ともす 夜のひろば  
むかしのラルゴを うたひかはし  
雲をもどよもし 夜風にわすれて  
とりいれまちかに 年ようれぬ
- 2 まさしきねがひに いさかふとも  
銀河のかなたに ともにわらひ  
なべてのなやみを たきゞともしつゝ  
はえある世界を ともにつくらん

「ポラーノの広場」は、完成されずに草稿で終わったが、宮澤賢治が「銀河鉄道の夜」で「ぼくたちこゝで天上よりももっといゝとこをこさえなければいけないって僕の先生が云ったよ。」とジョバンニに語らせた、その先生から与えられた宿題に対する賢治の精一杯の答案であった。

「ポラーノの広場」は賢治の死の翌年に刊行された『宮澤賢治全集』(全3巻、文圃堂、1934~35年)に収録されたことで公表された。35年に、賀川豊彦の『乳と蜜の流るゝ郷』(改造社、1935年)が刊行された。賀川豊彦は「ポラーノの広場」を実現することに生涯をかけたといえる。

賀川豊彦の協同組合運動は、賀川の魂そのものである。戦後、1952年に北海道の酪農学園を訪れた賀川は、「讚歌酪農興国」(通称「酪農讚歌」)という歌をつくり、学園へ贈った。賀川純基が作曲し、酪農学園で今日まで歌い継がれている歌である。



【写真：「酪農讚歌」(賀川豊彦記念館(神戸)に展示)。松野尾撮影】

- 1 黒土よ 緑なす草 身につけて  
地上を飾る日の本に〔原詩は、野幌に〕  
牛追う若人はぐくめよ  
窮乏の底に沈める国興せ  
乳房持つ神 我と共に
- 2 はらからよ 手に手をとりて 村守り  
弱きを助け 貧しきを  
いたわるために 勇み立て  
窮乏の底に沈める国興せ  
乳房持つ神 我と共に
- 3 み光に めぐみはつきず つまずく日  
倒るる時も 見捨てずに  
我をはげます神の愛  
窮乏の底に沈める国興せ  
乳房持つ神 我と共に

賀川豊彦も宮澤賢治もベジタリアンだった。それは、農民の食卓に自家製のハムやソーセージが上がり、皆で楽しく皮加工し、ホームパンをする日が来ることを祈ってのことであった。キリスト教と法華経という異なる信仰を持ち、<sup>99)</sup> それぞれに独自の信念にしたがって新しい人づくり、新しい郷づくりを目指した賀川豊彦と宮澤賢治は、実は、至って近いところにあったのではなかろうか。

99) 賀川豊彦は、仏教の經典のなかでとりわけ法華経に関心をもっていた。1923(大正12)年に法華経の現代語意識(里見達雄訳著『法華三部経 現代語訳』仏教經典叢書刊行会、1923年)が出版されたのを機に、賀川はその意訳本で法華三部経(「無量義経」「妙法蓮華経」「仏説観普賢菩薩行法経」)を読み、その感想を「法華経を読む－法華経とイエスの福音－」と題した短い文章にまとめている。賀川は福音書と重ね合わせて法華経をこう捉えた。「イエスの精神をよく理解する為めに、放蕩息子の譬、火宅の譬(迷へる羊を尋ねる心持によく似てゐる)、最微者を愛する心持、凡てに化身して救を完うする精神などを教へてくれる法華経は、決してイエスの敵で無いと思ふ。それは永遠の生命を説き、真理の把持を説き、それは肉の誇とする靈の勝利を説くことに於て、ヨハネ伝福音書の東洋流の註釈書と解して少しも差支へは無い。

## 参考文献

- 岩手日報「新しい農村の建設に努力する 花巻農学校を辞した宮澤先生」『新校本 宮澤賢治全集』第16巻・下、補遺・資料・年譜篇、筑摩書房、2001年
- 内村鑑三『後世への最大遺物・デンマルク国の話』岩波文庫、2011年
- 内村鑑三『地人論』岩波文庫、1942年
- 大内秀明編著『賢治とモリスの環境芸術－芸術をもてあの灰色の労働を燃せ』時潮社、2007年
- 大木市蔵「創業二十周年を回顧して」群馬畜産加工販売農業協同組合連合会編『高崎ハム創業二十年史』群馬畜産加工販売農業協同組合連合会、1958年
- 大木市蔵・鈴木洋一『実験 豚の屠殺解体加工法』愛知県猿投農学校同窓会、1939年
- 大島丈志『宮沢賢治の農業と文学－苛酷な大地イ－ハトーブの中で』蒼丘書林、2013年
- 賀川豊彦『農村更生と精神更生』(教文館、1935年)『賀川豊彦全集』第12巻、キリスト新聞社、1963年
- 賀川豊彦『地球を墳墓として』(アテネ書院、1924年)『賀川豊彦全集』第21巻、キリスト新聞社、1962年
- 賀川豊彦『雲水遍路』(改造社、1926年)『賀川豊彦全集』第23巻、キリスト新聞社、1963年
- 賀川豊彦「身辺雑記」『賀川豊彦全集』第24巻、キリスト新聞社、1964年
- 賀川豊彦『乳と蜜の流るゝ郷』(改造社、1935年)復刻版、家の光協会、2009年
- 賀川豊彦・藤崎盛一『立体農業の理論と実際』日本評論社、1935年

読んでゐる中に、私はあまりにその相似てゐるのを見て驚いた位である。そして賀川は、「法華経が教へてくれる凡ての尊いものを私自ら実行しよう。」「『最微者に対する跪拜!』その心持で行くことが法華行者の最大なるものなるを知つて」「私は何等の偏見なしにかく云ひ得ると思ふ。もし、私がイエスの福音を知らなければ、必ず法華の実行に努力してゐたらう。そして、その法華の実行をしてゐる中に、イエスを発見したなら必ずイエスに随いて行つたらう。私は法華経を読んで更にヨハネ伝福音書をより深く味ふ氣になつた」と述べている。賀川豊彦「法華経を読む－法華経とイエスの福音－」『地球を墳墓として』(アテネ書院、1924年)『賀川豊彦全集』第21巻所収、317、318～319頁。このエッセーは『東洋思想の再吟味』(一燈書房、1949年)『賀川豊彦全集』第13巻所収の「第7章法華経の吟味」に再録された。

- 和村誌編集委員会編『和村誌 現代編』東部町教育委員会, 1963年
- 川端康雄『ウィリアム・モリスの遺したものーデザイン・社会主義・手しごと・文学』岩波書店, 2016年
- グルントヴィ／小池直人訳『ホイスコーレ』上・下, 風媒社, 2014・15年
- コル／清水満訳『コルの「子どもの学校論」ーデンマークのオルタナティブ教育の創始者』新評論, 2007年
- 雑賀信行『宮沢賢治とクリスチャン 花巻篇』雑賀編集工房, 2015年
- 斎藤宗次郎／栗原敦・山折哲雄編『二荊自叙伝』上・下, 岩波書店, 2005年
- 佐々木正治『デンマーク国民大学成立史の研究』風間書房, 1999年
- 菅原忠夫『三愛塾の碑ーある口百姓の手記』あづま書房, 1992年
- 田中宏・大木市蔵『実用豚肉加工法附製革法』西ヶ原刊行会, 1933年
- 東北学院資料室運営委員会「大正デモクラシーと東北学院」調査委員会編『大正デモクラシーと東北学院ー杉山元治郎と鈴木義男』東北学院, 2006年
- 苫小牧民報社「『銀河鉄道の夜』地上モデルは王子軽便鉄道!?」『WEB みんぼう 苫小牧民報社』2016年11月28日 <http://www.tomamin.co.jp/20161145086>
- 沼津市明治史料館編『興農学園ーみかん村とデンマーク教育』沼津市明治史料館, 2000年
- 平林広人『丁抹農村文化の真髓』文化書房, 1930年
- 藤崎盛一『くるみの栽培』新約書房, 1951年
- 藤崎盛一『農民教育五十年ー乳と蜜の流るゝ郷を求めて』豊島農民福音学校出版部, 1976年
- 藤崎盛一・農民福音学校編『農民福音学校ー農民福音学校50周年記念誌』立農会, 1977年
- フロム／川端康雄訳『宮沢賢治の理想』晶文社, 1984年
- 北海道畜牛研究会編『丁抹の農業』北海道畜牛研究会, 1924年
- ホルマン／那須皓訳『国民高等学校と農民文明』同志社, 1913年
- 松岡幹夫『宮沢賢治と法華経ー日蓮と親鸞の狭間で』昌平齋出版会, 2015年
- 松野尾裕「賀川豊彦の経済観と協同組合構想」『地域創成研究年報』第3号, 愛媛大学地域創成研究センター, 2008年
- 松野尾裕「二人の協同組合主義者 黒澤西蔵と賀川豊彦ー『乳と蜜の流るゝ郷』によせて」『日本経済思想史研究』第13号, 日本経済思想史学会, 2013年
- 松野尾裕「グルントヴィと北海道酪聯の開拓者たちー宇都宮仙太郎と出納陽一を中心にして」矢嶋道文編『互惠と国際交流』クロスカルチャー出版, 2014年
- 松野尾裕「御殿場農民福音学校と食肉加工品製造の実践」『愛媛経済論集』第34巻第2号, 愛媛大学経済学会, 2014年
- 松野尾裕「賀川豊彦と黒澤西蔵ー相互扶助の思想にもとづく教育と実業」『賀川豊彦学会論叢』第24号, 2016年
- 松野尾裕「岩手県沼沢の三愛塾運動」『雲の柱』第31号, 賀川豊彦記念松沢資料館, 2017年
- 松野尾裕「三浦所太郎と東北農業協会・東北ミッション」『愛媛経済論集』第36巻第2・3合併号, 愛媛大学経済学会, 2017年
- 三浦所太郎遺稿集編集委員会編『三浦所太郎遺稿集 丘の家の囲炉裏から』三浦恵子, 1987年
- 宮澤賢治「産業組合青年会」『新校本 宮澤賢治全集』第3巻, 本文篇, 筑摩書房, 1996年
- 宮澤賢治「ポラーノの広場のうた」『新校本 宮澤賢治全集』第6巻, 本文篇, 筑摩書房, 1996年
- 宮澤賢治「フランドン農学校の豚」『新校本 宮澤賢治全集』第10巻, 本文篇, 筑摩書房, 1995年
- 宮澤賢治「ポラーノの広場」『新校本 宮澤賢治全集』第11巻, 本文篇, 筑摩書房, 1996年
- 宮澤賢治「銀河鉄道の夜」『新校本 宮澤賢治全集』第11巻, 本文篇
- 宮澤賢治「セロ弾きのゴーシュ」『新校本 宮澤賢治全集』第11巻, 本文篇
- 宮澤賢治「農民芸術概論綱要」『新校本 宮澤賢治全集』第13巻・上, 本文篇, 筑摩書房, 1997年
- 宮澤賢治「雨ニモマケズ手帳」『新校本 宮澤賢治全集』第13巻・上, 本文篇
- 宮澤賢治「修学旅行復命書」『新校本 宮澤賢治全集』第14巻, 本文篇, 筑摩書房, 1997年
- 『新校本 宮澤賢治全集』第15巻, 本文篇, 筑摩書房, 1995年
- 『新校本 宮澤賢治全集』第3巻, 校異篇, 筑摩書房, 1996年
- 『新校本 宮澤賢治全集』第6巻, 校異篇, 筑摩書房, 1996年
- 宮澤清六・他編『写真集宮澤賢治の世界』新装版, 筑摩書房, 1985年
- 芽生村塾研究会編『芽生丘の青春ー芽生村塾・北

海道農民福音学校』芽生村塾研究会，2001年  
ゆかいな仲間テンドーズ（旧大東町教育委員会主  
催町民大学男女共同参画講座受講者有志）編『郷  
土を拓いた女性－金ふさ先生』ゆかいな仲間テ  
ンドーズ，2015年

## 謝 辞

本稿の内容は，2017年5月28日に鳴門市賀川豊彦記念館で開催されたNPO法人賀川豊彦記念・鳴門友愛会第16回通常総会で行った講演において発表した。講演では参加者の皆様からご感想やご質問をいただきました。お礼を申し上げます。講演を企画して下さいました名誉館長の田辺健二先生，館長の岡田健一先生はじめ事務局の方々に心よりお礼を申し上げます。



【写真：上・船本牧舎（現存）。船本宇太郎（1895－1980）が，第一次世界大戦後俘虜として鳴門にいたドイツ人から酪農・畜産を学び経営した。牧舎の2階で阿波農民福音学校が開校された。下・阿波農民福音学校で講義をする賀川豊彦（鳴門市賀川豊彦記念館2階に展示。同記念館の建物は船本牧舎を模してつくられている）。松野尾撮影】

## 追 記

本稿を脱稿後，田辺健二先生から中嶋信氏の論文「宮澤賢治の協同組合構想」『国際学研究』第6巻第2号，関西学院大学国際学部研究フォーラム，2017年所収をご教示いただいた。早速一読し，中嶋氏の関心と私のそれとが共通することを知った。中嶋氏は「賢治が目指す協同組合像は……個人の自立や高い倫理性を重視する賀川の主張と親和的といえる」（同論文，13頁）と述べておられ，この点について私も同感であることは，本稿で示している通りである。私は，宮澤賢治の協同組合構想と賀川豊彦の協同組合構想とが結びつく接点（思想的のみならず地理的に）として，賢治の親友で花巻教会の信徒であった島栄蔵の存在を挙げた。島は，岩手県東磐地域で賀川の指導の下にキリスト教青年たちと共に三愛塾（農民福音学校）を立ち上げ，産青連にも取り組んだ菅原忠夫の親友でもあった。島は実際に宮澤と菅原を引き合わせようとした（菅原忠夫『三愛塾の碑－ある口百姓の手記』48～49頁）。賢治は島栄蔵から農民福音学校の活動について聞き，それを童話「ポラーノの広場」の完成を目指すなかで活かしたのではないかというのが私の主張である。

本稿は，日本学術振興会科研費助成事業（課題番号：16K03573，研究課題名：日本における相互扶助の経済思想の現代史的意義に関する研究）による研究の成果の一部としてまとめられたものである。